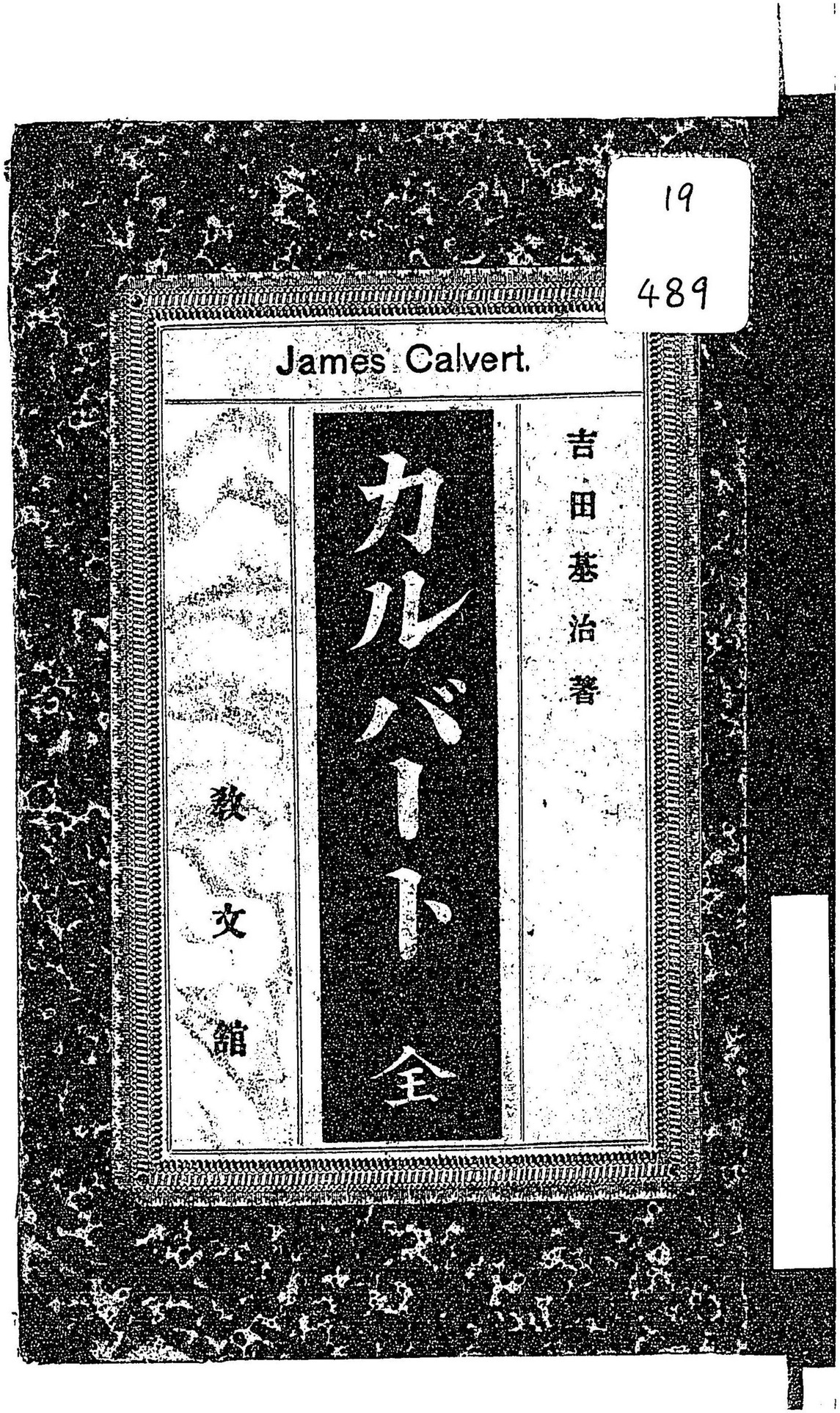


020349−000−8

19−489

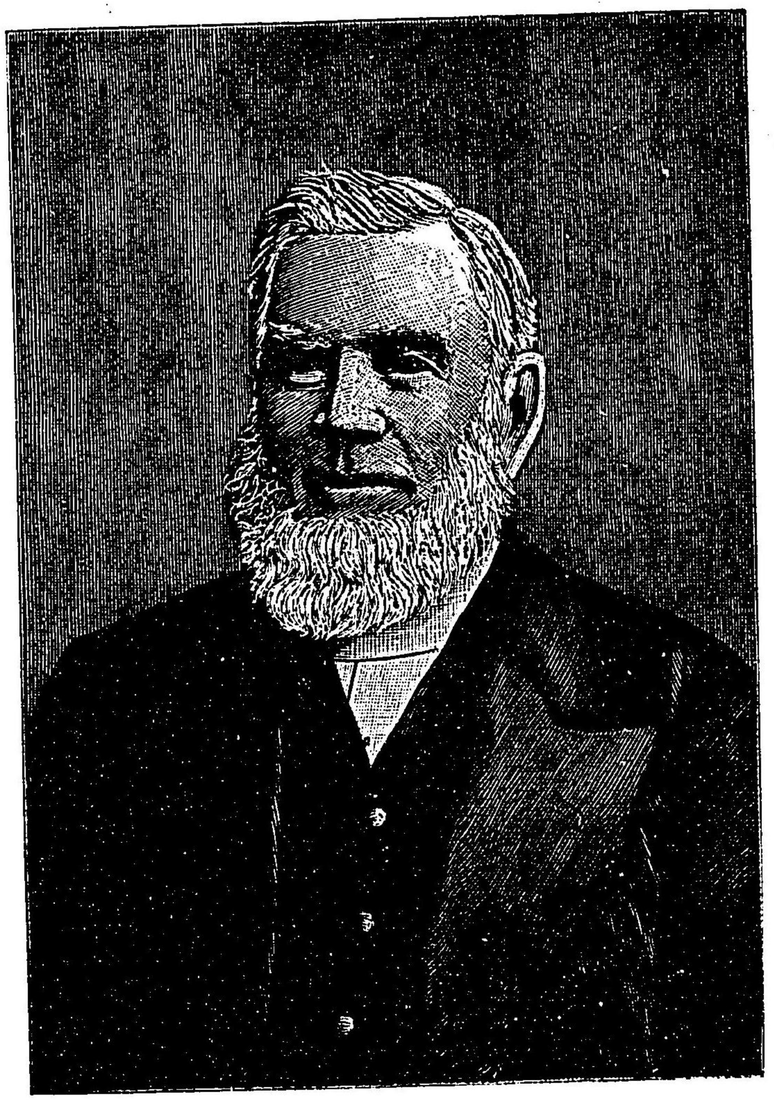
カルバード

吉田　基治／著

図版

M29

ABI−0155



JAMES CALVERT.

ゼームス カルバート

19-489

カルバドル全

明治三九

ゼームス、カルバード目次

其一　非地島總論……一頁
其二　非地島の開路者……十一頁
其三　カルバートの幼年時代と結婚……三十一頁
其四　ラケンバの傳道……五十二頁
其五　正義と殘忍の戰……六十八頁
其六　正義と罪惡の戰(上)……八十五頁
其七　正義と罪惡の戰(下)……百頁
其八　ピワ孤島及バウ孤島(上)……百十頁

其九　ビワ孤島及バウ孤島(中)……百二十一頁
其十　ビワ孤島及バウ孤島(下)……百二十九頁
其十一　福音の凱旋……百三十六頁

非地島總論

ゼームス、カルバート

吉田基治著

廣漠たる南太平洋の一孤島、非地(フィジー)に福音の傳播したる由來を知らんと欲する者は、ゼームス、カルバートの一生涯を記臆するを要す、何とおれば彼は全島に福音を宣傳して、蒙昧なる土民の心底に限りなき救の道を傳へたる偉人なればなり、然り而して、カルバートの傳記と非地(フィジー)島傳道の歴史は世上稀れなる福音の凱旋と戰慄すべき物語を以て充さる、其の夫妻が志を一にして力を合せ、相提携して煙波渺茫たる大洋の一孤島に渡り、身を犧牲に供し、將た又眞心を神に捧げて、野獸の如く猛烈なる土民を救はんとしたる事の如何に勇壯活潑なるよ、この一宣教師が一

度思ひを決して、其の愛する故國を去り該島に渡るや、當初尤も慘酷なる土民の爲に心身を惱まされたるのみならず、又實に頑固なる情況の下に粉骨碎身の働きを成したりき、其今日全島足跡の及ぶところ神を讃美する聲を聞ざる無きに至りたるは、彼が奮然一生を孤島に捨つる決心を以て、憫むべき天刑の民を救はんが爲に惡と戰ふたる結果にあらざるはなし、ナザレのイエスは曰く「其仇を愛し、爾曹を憎む者を善し、詛ふ者を祝し、虐遇者の爲に祈禱せよ」と、カルバートは唯此戒語を服膺して、「終りまで忍び」、其胸中「信じて恐れざる」決心の外他に一物もあらざりき、蓋し全島民が遂に基督教の善德を慕ひ、高き人も低き人も彼を兄弟として親しみ、富めるも貧しきも彼を友人として愛するに至りたるは偶然にあらず、而して事茲に至るまでには、彼が其身を暴風暴雨に曝し、人生の至苦至難を意とせざりしことを記憶せざるべからず。

地理を案ずるに、シドニーの北一千七百六十哩、ヨークランドの北一千百七十五哩、南太平洋に位して、豆粒の如き三百有餘の小島より成立せる者を、所謂非地島（フィジー）とあす、この夥多の群島中、其大なる八十島には粗造の家屋點在し、また土民の住居するを見ると雖ども、他は實に小にして多くは海中に浮沈し、只退潮の際僅かに其半形を認め得るに過ぎず。此近海や、夥しく珊瑚樹を生ずる處にして、其樹形誠に奇なり、而して島の大部分は概ね珊瑚礁（カラルリーフ）を以て圍繞せらる、これ恰かも一孤舟が風濤穏かなる內地の湖水にありて安全なるが如く、此の珊瑚礁（カラルリーフ）は一方に於て、非地諸島を大洋の暴風怒濤より免かれしむる天然の城壁なり、見渡す限り海波万里孤島の民、他に慰み樂しむパラダイスなしと雖ども、而かも上帝は此の島民に世界稀れなる珊瑚樹の特產地を賜ふ、これ非地島（フィジー）民が、終生榮々として他に移住を企てざる所以か、況んや其沿海には世

界絶特の美景多く存するに於てをや。

抑も珊瑚虫は新鮮なる水中に生存するもの、故に非地邊海、殊に内地河川の水流水清き所に於ては、時々破損せられたる珊瑚虫の殼を見出すと無きに非ず、而して此暗礁多き地方は、船舶の往來困難にして、安全なる航路を見出して船を遣るは航海者の切に注意を要する所ろとす、加之鋭峯幽谷の山嶽は崔嵬として雲表に聳へ、熱帶地方に蕃殖せる葉篠は青々として島の全面を蔽ひ、海濱は廣濶にして、時に大洋より吹き寄せ來る泡沫は、其沿岸に蔓衍せる椰子樹の葉に斑點を止むるとあり、其島面の不規律なる、もと火山源の夥しきに由來するとは云へ、亦た人をして數世紀間、天然第一の震動を被りし結果にあらざる無きやを疑はしむ。

非地（フィヂー）島天然の愛すべきは、既にゴルデン、カムミング嬢の著作「非地の家庭」に於て、精密に記載され世に紹介せられたるを以て、今ま事新しく茲に多辯を要せざるが如しと雖ども、吾人は未だ之を知ざる人の爲に左に其概要を記せんと欲す。

夫れ非地（フィヂー）港内は最も藍色に富む、其奇怪なる天然の風景は一見人をして驚かしむるのみならず、洋中紫色に濃厚なる菁は、時に三角玻璃の如く燦爛たる光線を水中に發し、宛然此岸より彼の岸に架せる虹の如き者を其水面に認めしむ、加之奇形なる珊瑚樹、葱々たる海草、艶たる白砂は、水晶よりも美はしき水底に横たはりて、異種の幻影を人目に映せしめ、其風景の佳絶なる一見觀者の魂魄を奪ふ、蓋し之れ皆な珊瑚礁の潮の滿干、日光の作用等に依りて自ら水面に絶特の美景を畫き來るものあり、是れぞ太平洋の一孤島に於て見るを得べく、他に求めて得がたき風景とおす。

抑も多島海の主要なる島嶼は、ヴアヌアレブとヴアチレブの二島尤も大なる者にして、ヴアヌアレブは東西經百哩、南北徑二十五哩、ヴアチレブは東西徑九十哩、南北經五十哩にして、前者の人口は五万にして後者の人口は三万千となす(或は云ふ十三万と、又云ふ二十万と異說紛々として其確說を得ず)、此他稍々名高き島嶼には、左の五島あり、ダヒアニ、バウ、ラケンバ、ヴアヌア、バラヴ、ヲヴアラウ。

世界人肉を喰ふて榮譽とおす、食人々種多き中にも、非地島民はポリチシヤ土民より稍々優等なる者の如し、何とおれば其一方に於てこそ、彼れ非地島民は實に慘酷なる慣習こそ有すれ、他方に於ては、土人の衣服、陶器、假髪(土人の被る帽子の如き者)等野蠻人民に必要なる器具を製作するに巧妙なる技倆を有せり、されど其家屋の建築に至りては、彼れ遂に隣邦州民の上に出づる能はず。

此の如き巧妙なる技藝を有する中、殊に彼等の熟練は最も陶器製造に於て現はる、而して其陶器製造の方法の如きは誠に美術的趣味を有する者あり、殊に知らず、この野蠻の民が如何にして斯かる技術を學び得たるかを、是れ實に疑問中の疑問となす、非地人は辯解すらく「これ往古我が祖先が泥工(ポーリン)より學び得たるものあり」と、思ふに此怜悧にして不熟練なる土人に製造せられたる、微妙なる幾多泥土製の器具が、全島各土人の家庭に於て、或は料理用に、或は水酌み用に、普く使用せらるゝを以て見れば、蓋し彼れ土人の辯解は事實なる者の如し、以上の如き風景美術を有する民、他に最も悲しむべき憎むべき至惡の習慣ありて存す。非地(ファジー)島至惡の慣習は、この無罪の人間を虐殺して其肉を喰ふと是なり是れ素と一時の憤怒或は怨恨より由來するに非ずして、詮し來れば其生命を全ふする爲の規則(ルール)ありと誤解し居る者の如し、されど其實際を

觀察し來れば、需用供給の法未だ全く行はれず、全島食物の缺乏は、此土民をして自ら放縱慘酷の處行を爲すの己むを得ざるに至らしめたりとは云へ、豈に高尚なる人情（ヒユウマニチー）を解する者の爲すべき處行あらむや、請ふ見よ、幾多虐殺されたる人肉が、普通一般の食物よりも嘉肴珍味なる物として、其土人間に如何に尙美せらるゝよ、或は喰はんが爲に壓石を以て準備されたる屍が、時として如何に多く積み重ねられたるとあるよ、是等は唯下等土人の仕業なるのみならず、其餓鬼大將たる首長に至りても、又記錄紙上如何に多く無罪の民を屠り、如何に多く人肉を食せしかを積算するを以て此餘なき快樂と爲すが如きを見る、豈に啻に此の如きのみならむや、ワンガ、レブ及びラ、アンドレ、アンドレの如き首長は、自ら出でゝ將さに虐殺せんとする人體に壓石を置き、聊か智識を有する土人は之を數へて九百名を得たりと云ひ、また全種族中他の一部の者は、其記錄上嘗て基督教徒と成りし者四十八人を殺したるを見たりと云ひ、其甚しき者に至りては、一夜訪問者を饗應する爲に五十人の屍を料理し、膏血未だ乾かざる其肥肉は、宴會の客膳に上り、その渦高く盛られたる刺身は、多くは、年長者の肉ありと雖ども、又新鮮なる浮世の大氣を呼吸したる計りなる、無邪氣なる赤子の肉も其膳部を飾りつゝありと謂ふに至りては、嗚呼吾人常識（コンモンセンス）を有する者亦た言ふに忍びざるなり。

非地島民が野獸の如き猛惡の慣習に依て、慘酷の處行を爲すと此の如し、此他は類推して知るべきなり、然り而して、野獸的惡慣習を有する此土人、遂に善良なる神の僕となる能はざるか、否な、既往に遡れば彼等も素と神に肖せて造られたるものなり、其擧動如何に粗暴なるにせよ、是れを化育するに其法を以てせば、遂に其心底に潜める上帝を外に表現

し、高遠幽妙なる思想界に游泳し、無限の知識を得んことを志し、上帝の秘義に通じ、以て人間としての本分を盡す者となす能はざらむや、請ふ百尺竿頭一歩を進めて、この野蠻の民を敎化したる偉人に就て言はしめよ。

其二　非地島の開路者

野蠻蒙昧なる食人々種なる、非地人と始めて交通したるは、全島の西南二百五十哩に存在する友義島より渡航せし、トンガ人が最初交易を成さんが爲にラケシバに上陸したるが嚆矢にして、爾來此のトンガ人は、猛惡なる慣習を以て、殘酷なる處行之れ事とする土人と戰ひ、ラケンバを占領して茲に殖民地を開き、遂に非地諸島に住せる各土人と無味淡泊なる交際を爲すに至れり、然れども此は只野蠻人と野蠻人の交際に過ぎずして、福音の光は未だ全島に照り渡らざりき、文明の光は輝かざりき。

一千八百三十四年、トンガ敎會の敎役者と熱心なる土人の改宗者は、聖靈彼等の上に降臨して、先づ友義島を敎化し、次て非地の土民に福音の傳はらんことを熱禱せり、而して此熱心なる祈禱の應答として、大収穫の

幸運は彼等に與へられたり、温厚篤實、愛に濃厚に義に勇なるトンガ教會信徒の一運動は、其土人に大感動を與へ、立に多くの改宗者を生ずるに至らしめたり、就中トンガ王ジョージ、タウの夫妻は、此時忘るべからざる眞理の光を其心底に印し、自己を罪惡の淵より救ひ出して永生に入らしむるは、神の獨り子基督の外なしと、烈火の如き信心其胸奥に燃へ、從前野蠻教の崇拜者、勇悍猛惡の首長殘酷極まる食人々種として、只其壓制權を張るに汲々とし、亦た人生の何者たるかを知らざりし王をして、終に熱心なる基督信徒とならしめたり、

トンガ教會信仰回復の結果として、其土人を感化したること此の如し、今は一歩を進めて、其隣島非地に福音を宣傳すべき好時機なり、それ暴れたる野豕を以て恐るべしとせば、暴れて團結せる人間は尤も恐るべきなり、然り而して、世界人類の住居する土地多き中にも、人を殺して其肉を喰ふ非地人の如きは尤も恐るべき者と謂はざるべからず、何となれば彼れらは人間世界調和の機關とも云ふべき、高尚なる人情を解せず同情を有せざればなり、猶ほ進んで之を言へば、霊（スピリット）の人として、立つ能はざればなり、此の如き蒙昧の民、遂に文明的好生涯を送る人民となる能はざるか、世界の至聖は曰く「我が來りしは義人を召く爲に非ず、罪ある人を召て改悔めさせん爲めなり」と、若し此言葉の如く基督教徒にして、他言語粗暴に渉り、行ひ規矩に外れたる人を救ふ義務ありとせば、熱心なる信仰を有せるトンガ教會の兄弟は、彼の人生惡の極點を働きつゝある非地人に向て限りなき救ひの道を注入せざるべからず、何となれば是れ信徒の負へる一大天職なればなり、然り而して、好運は遂に到來しぬ、トンガの信徒は今や其志望を遠大にし、日夜思ひを焦し力を盡して傳道の方法を研究したり、而して早くも彼等の中には、非常なる障

害に遇ふて倒れず、非常なる困難に接して屈せざる志は決せられぬ、曾に斯かる決心が成されたるのみならず、彼れらは眞心を神に捧げて日夜天を仰ひて嘆願したりき、それ至誠天を動かすは古より然り、此熱心なる祈禱の應答如何でなからむや、其年の暮れつかた、トンガ教會に働きつゝありしダブリユー、クロス、ダビッド、カージルの三人は、主の召を蒙りて非地に派遣せらるゝことになりぬ、この三人の宣教師は其命に接して毫も悲み歎くことなく、寧ろ勇志勃々夫妻相携へて、殺氣空を蔽へる非地の首港ラケンバに向つて出發せんと其準備に取り掛りぬ、

當時トンガ王ジョージは、此豪勇壯快なる企圖に就て非常に感激する所あり、該宣教師と共に使節を派遣して、ラケンバ王ツイナヤウに親交を通せんとせりき、思ふに是れ寛容なるトンガ人が、基督教の感化を蒙りて以來、如何に温良博愛なる善良の民となりしかを示さんとしたると同時に、彼れ非地人が歡んで世界唯一の宗教を迎ゆるや否やを試みんとしたるなり、然り而して、吾人は此後ち如何に恐怖すべき迫害が、彼れ野蠻人に依て企たてらるゝかを注視するを要す、案ずるに此の冒險的傳道は啻に眞正の愛と燃ゆるが如き信仰を有てる、彼れ宣教師のみに依て爲さるゝに非ず、吾人は其忠實なる妻子も又一の冒險家たることを信せんと欲す、況んや前途頑固なる土民の大抵抗大迫害にも撓まず屈せざる、彼れ宣教師一家族の決心は實に賞讃すべきなり、

非地傳道が決せられてより數日にして、甚小なる三桅檣船は、冒險的宣教師の一家族とトンガ王の使節を乘せ、烟波渺茫たる大平洋の荒波を蹴て出帆しぬ、ア、此の一孤舟の向ふ陸地、今後如何なる結果を現はし來るべきか、是れぞ吾人が眼前に横はる一大疑問なる、四日間の不愉快なる航海の後ち、一大希望を抱ける宣教師の一家族を乘せたる孤舟は、

非地の首港ラケンハに到着じぬ、宣教師の一行は困難なる航海中の疲勞をも意とする所なく、直に短艇に遷りて阜頭に上れり、此時眼に映ずるものは何んぞ、武裝せるトンガ及非地土民の一大群衆が、何に故か此一行を見て大に騒ぎ立ちたる事にてありき、然れども何の妨害を爲す能はざりき、一行は故障なく此處を通過して、阜頭より遥かなる彼方カヤウの王宮に至り謁見を請ひぬ、謁見は容易に聽され、眞心と至愛を込めて談ぜる宣教師の會話は、王に大なる感動を與へたる者の如く、豫想外にも王一個人に於て基督教は歡迎されたりき、王は其土民に福音を宣傳して、彼れ憫ひべき民を教化すべきことを許容したるのみならず、即時一行の永住すべき家屋をすぐに建築すべく約束せりき、これ曾て野獸の如き非地島民を文明に導く端緒なるのみならず、將又彼れらに新生命を與へる導火線なりき、然れども人事兎角蹉跎たり易し、暗澹たる

危難の雲は、常に假粧せる平和の反面に急行するを知らずや、諸氏吾人をもて是を叙述する前に暫らく此土民の家屋に就て言はしめよ、そもそも非地に於ける家屋の建築法は、歐米に於ける文明國人民が多くの時日と莫大なる金錢を費消して、漸く一家の落成を爲すが如き者に非ずして、實に短時間に神速機敏に建築せらる、假令堅固に且つ廣大なる建物と雖ども、概ね二週日より三ヶ月を出でず、而して其一家を組成する大部分は、柱、小桁、葺茅、長き斜線形の家根、シンネットを以て結緊せられたる厚くして低き葺茅の壁に過ぎず、其建築材料や既に單順なりき、これ此土地に於て家屋が神速に建てらるゝ所以なり、而して其建物の粗造なるは言ふを待たず。[illegible]非地島に釘鎹なし、故に其物と物を配合し或は結緊するには常に「シンネット」を用ゆ、此は素と椰子樹の皮より製する者にして、當初土民が之

を剝き取るや、直に太陽の熱に因て之を乾かし、後ち櫛を以て細絲と爲す、その細絲は時に魚網に編成せられて漁獵の用に供せられ、亦た時に織り立てられて、寺院、家屋の粧飾品とせらる、豈に啻に粧飾品とせらるゝのみならずや、衣服包物等日用品の原料は全く此の「シンチット」なり、而して該細絲を組合したる者は、恰かも本邦に於ける繩の如く、非地島に於ては、家屋の建築其他凡ゆる大切なる部分に使用せらる、是れ支那人に竹が必要なる如く、シンチットは非地人は一日も無くて叶はぬ者なり、[illegible]

家根は概ね長さ五六尺の砂糖木の葉及び「ネトッパ」の葉を重ねて之を葺く、これ非地に於ては光も堅牢なる家根を組成する者なれども、是は單に之を家根に使用するのみならず、何事にもあれ蔽ひの必用なる時は、山野を跋渉して此の長竿高き草茅の類を刈り來り、以て其用を充たせり、而して天井は至る處茅並に蓆を編みて之を作る、然り而して其一家を設立する時の如きは、三四百の男女各々競ふて勞働に從事し、甲は乙を助け、丙は丁を助け、或は茅を揃へる者あり、或は長く高き砂糖木の葉を家根に送る者あり、或は家根を葺くものありて、喃々喃々、恰かも早天八方に飛出たる雀の族か、夕暮の團樂に今日の出來事を語り合ふが如く、其喧しきと遠村に午睡せる翁の夢を破ること數々なり。[illegible]

宣教師の住家は、今又斯くの如き驚きを以て建てられたり、家の內部は廣き一室と其方隅は一尺高く座を設く、則ち廣き者は集會の用に供し、高き者は晩宵睡眠の時に至り、一家相聚ふて眠に就くの寐室に供せらる、而して室の二方には恰かも開閉自在なる戸の如き圓形の明窓あり、床は最底に粗惡なる棕櫚の葉を敷き、其上に不潔なる蓆を積み重ね以て疊に代ゆ、夜衣は南洋群島に使用する白蓆にして、質固より和かにし

て一見心地善きが如しと雖ども、其實は濕氣甚だ多くして勢ひ健康を害するに至る原因たらざるを得ず。[illegible]

神の愛すべき宣教師の一行は、粗造なる而かも健康に適せざる此家屋の出來するまで、綠水の島ラケンゾ港に碇泊せる一孤舟に手を空しゅうして俟ちたりき、されど吾人が前陳せる如く、粗造なりと雖ども其住居は成就せり、ラケンゾの玉は宣教師に對して曰く「先づ此家屋にて暫時忍耐せよ、余後堅固なる者を建てゝ是れに代へん」と、一行は其厚情を多謝して孤舟より新家屋に遷れりき、然れども玉は此建物が暴風の爲に破壞せられても遂に前の誓ひを實行せざるとは後に知られたり、然り而して、當時宣教師一家の心底には此の如き困難は寧ろ前途偉道上の一經驗となるべきのみなりと、唯身自ら屬石慰藉を外他國に物送り送りる。種々の註書と困難に就て奔走し[illegible]一行は、[illegible]時日を消費したれど、非地島第一の安息日を迎ゆるに至りぬ、基督教禮拜は始めて開かれたり、福音は土人が移住民及非地土人に理解され易き言語に依て照會されぬ、新時限は今を開拓、新文明は今を注入され、新生命の道は今を傳へられたり、其風俗を改良し、其思想海に一大變革を與ふるに至るは蓋し遠きにあらざるべし、而して茲に始めて福音宣傳の端緒開けたると同時に、宣教師の一家は、土人に大なる益を與ふるものとして、將又其説教は眞理を教へると言ふよりも、寧ろ奇怪なる物語として一般土民の注目を引くに至りぬ、爾後宣教師は數々土人を訪問して、彼等に珍らしき食物、奇怪なる道具、雪の如く白き金布等を惠みたりき、是れ最初より其心底に眞理を吹き込まんが爲に非ず、寧ろ彼等を懷かし親しましめむ爲めなりき。[illegible]而しも此の懷かし親しましめんと欲してなされたる數々の訪問は、却

つて一の不便を與ふるに至らしめたるのみにして、毫も利益なかりき、否な寧ろ異教徒の傲慢心を增長せしめたるのみ、然れども聖靈の恩惠は常に彼れ可憫の宣教師の上にありき、それ確かに道を信じ、博く人を愛し、身を犧牲に供して義務の爲に全力を獻ぐる人の生命、豈に此非地島民を感化せずして止むべけんや、然るに暫時にして求道者は續々出來りて信者は二百人の多きに至りぬ、禮拜堂は是れら改宗者の熱心に依て粗造ながらも建築されたり、聖書研究會は開かれて、異種の階級は分たれたり、豈に只是れのみならん、青年男女の爲には學校の設けまらるるりき。[illegible]夫れ人物を生むものは動物なれども、精神家を生むものは精神家なり、彼の到る處に飲匿せる生命を生ひ出るのは基督教なり、而も此斯教福音の證示たる彼の宣教師は、數月の間愛と眞心を表白も未熟者に教育したるに、其結果として再び三十二名の土民は洗禮を受るに至れり、之れ黯澹たる非地島に正義の道が傳はる嚆矢にして、亦た五里霧中に彷徨せる土民に人類の歸趣天職を覺醒しむる始めなりき、然れども迫害は今や他の方面に於て企たてられんとす。[illegible]前に忠實を以て基督教を保護せしラケンゾ王は、今や宣教師の數々する訪問と斯教の日に勢力を增加するを見て、此は遂に自己の權力を挫くに至らんとを恐怖し、茲に始めて猜疑の念を惹起し、前に伸びんとしたる善意は一朝にして萎縮し、元來の惡慣習今も更に凝つて迫害を加へんと欲するに至りぬ、而して彼れは當時實に其主動力なりき、ヲンガ移住民の首長ロトツは、早くも無賴の青年を誘導して、其一小市街ワチ

ワチ並にエイタンジに在る基督教徒の家屋を襲擊し、其家具を破壞し去り、甚しきに至りては信者の妻孥を虐殺し、偶ま機を得て逃亡したる

者にても追捕して殘酷に罵り、殘酷に非難し、或は短刀深く婦人の喉を刺し飽まで殺意を逞ふせりき、アヽ何んぞ夫れ深く惡習に染み、迷雲に蔽はれたるの甚しきや、[illegible]

迫害は此の如く、侵し掠むと火の如く、一と度餓ゆれば自己の愛兒をも殺す豺狼の如く、激して怒る時は血を啜りて尚は微笑む、猛獅暴虎に彷彿たる土人に因て成されたり、されど彼等如何に惡意を逞ふするも、見て見ぬふ、聞て聞べざる如くして、猶は其聲吾人が耳底に達し、其姿胸中確乎として認めらるゝ聖靈の進行を害する能はざりき、恰かも之れ深山に於ける溪川の水が、幾多支障ある樹間を潛りて尚は滾々として流るゝ如く、寧ろ聖靈は隱微なる働きの上に宿り、十字の光は日々夜々光輝燦然として照り渡りつゝありき、[illegible]

夫れ人間世界功名事業の野は荒として廣漠と雖ども、堪へ忍んで事に

從はずんば遂に善美なる成功を見る能はざるなり、然り、彼れ凛烈潔白の宣教師等豈に之を知らざらんや、彼れは悲しむ時に祈り、苦しむ時に祈り、失望する時に祈り、落膽する時に祈りたり、唯其れ祈りたり、祈るは忍ばんと欲する所以、彼れ一片の熱禱は、幾多眼前に横はる悲哀痛苦を慰め、絶へず勇壯活潑の元氣を與へたりき、況んや人は危險に遭遇して始めて眞情を發露し、奎き信仰を惹起するに於てをや、而して當時福音は斯の善良なる教に反對する人に依てよりも、當初之に半信半疑を置きし人に依て認めらるゝを得たり。[illegible]

非地に於て福音宣傳の困難は啻に茲に止まらず、又他に尤も憂慮すべき者ありて存す、此はラケンバ以外、他最も多く暗礁に圍繞せらるゝ各島の部落に福音を宣傳するとにてありき、而して是れに着手する賊に容易の業に非ず、彼の暗礁に不案内なる宣教師が各群島に渡らんとす

るは、恰かも大陸の船主並に氷夫が非地に渡航するを恐るるが如く、吾人は此の航路に不熟練なる宣教師の航海を始めざるを得ず、何となれば大洋に俄然起り來る暴風怒濤に際會し、これを避難する方法を知らざるが爲め間々かならざる危險に陷るとあるのみならず、將又暗礁に衝突して破船するに至るは、既に判然し居る道理なればなり、然れども福音を證する爲に生命を犧牲に供せんとする、彼の豪膽不敵の冒險家は爾後幸にて此危際を侵すに至らば、されど一航海をなす毎に時日は豫想外に費消せられ、現に或時の如きは、糧食悉く盡きて船員一同飢餓に頻し、遂に携帶せる器具を悉皆壮人に與へて僅少の食物を得此に至て始めて餓死せんとする大危機を免るゝを得たりと、豈に唯是れに止まらんや、ウイリヤムス、クロスの如きは、三年の長日月間只十枚の衣服を纏ふて經過するの已むを得ざるに至りたるとあるに到る迄

然、當時其光景の如何に困難なりしかは推して知るべきなり、然るに而も、彼れ冒險的宣教師が一度此現象を英國に報告するや、各地に散在せるウエレスレー教會員は大に感激し、遂に英國慈善家の同情は、彼れ冒險的教役者に向て堅固なる傳道船と其需用品を送るに至れり。爾來歷史上其名高き七年戰爭終局の歲彼の冒險的教役者の一人ウイリヤムス、クロスは、大非地を遙か隔て存在する、周圍三十哩の一孤島タウに傳道せんとてラケンバを去れり、而して此航海中彼れは其目的地タウ海を隔てゝレワ島の存するを見出し、此風景佳絶にして些少の住民ある島嶼も、他日聖靈の助力を借りて其島民の靈肉共に救ひ、遂に非地全島神を讃美する聲を聞かざる所なきに至らんとを豫想しつゝ、彼れはバウ新傳道地に到着しぬ、クロスは直に上陸して其首長に面會せりき、彼のラケンバの首長は實に粗暴野卑なりき、之れに反してバアウ

の首長は異國の民に對して國情の厚かりき、抑も人は深く近つき、切に關係を表し、互に眞情を開き、眞情を盡すときは、滔々たる世上の人概ね其心底に潜める美質を露はし來るが其常なり、クロス社談歩を進めると共に、其眞情を吐露し、此來島の要旨を陳述したるとき、酋長は其處說に感服し、遂に可憫なる宣教師の假住すべき家居は與へられ、是れと同時に此の高尚なる傳道事業を助けて大成せしむべく誓約せるとき、然れども茲に亦た憂慮すべきは其家居なりき、工造はクケンバに於ける家居の如く、粗惡にして濕氣多く、其不潔なる空氣は延ひて、間歇病、虎列剌、壓鉄斯の如き戰慄すべき惡毒を惹き起し、到底其健康に適せざるのみならず、此一因は御勇壯の希望を挫折せしめんとせり、嗚呼蒙昧頑固の習慣、迫然の困難と戰ふ宣教師の如何非同情なるか、恐れ慄愛に滿厚なる父なる神豈に之を見捨て給はざるや、一度開かれて又閉ぢられんとしたる非地の暗黑は今また亦た再び開かれんとす、時運は到來せり、

レワの近島ファバラウより突然米國殖民人は着せり、今や失望落膽に苦悶しつゝあるとき、宣教師は之を見て雀躍せざるべからず、彼れは實に旱天に膏雨を得たるが如く悅びたりき、而して彼の自由思想に富み、新事業に熱心なる米國殖民人は、クロスの傳道事業に大に同情を表して助力せり、バウ島の將來又多望なりと云へり、[illegible]

吾人が以上に說き去り說き來りたる如く、非地傳道は一方に於ては今や日出の勢を以て擴張されゝ、[illegible]

大非地の東方、珊瑚礁外に位し、[illegible]

せられぬ、此の[illegible]小島の酋長カモシ、マルクは前後熱心なる信者となり、遂に一の禮拜堂を設立し、二人の教役者は茲の土民を救はんが爲に又送られたり、されど盈んとするは欲けんとする理りか、吾人は今まで讀者

に向て悲報を傳へざるべからず、[illegible]
美れ暴れたる猪は獵夫に遇ふて愈々荒る、暴因はゆ之れと異なる[illegible]
ども、彼の宣名の熱心なる宣教師は、一大困難相續遇して益々奮勵し、今
や着々其大成功を見るに至らんとする時に當り、俄然英國ウエンスレ
イ傳道會社よりの命令は冒險家の歸朝を促がし來れり、二人は歸國
の途に就けり、非地文明の光は將に消ゆなんとす、赤子の父母を喪ふて
る如く、宣教師を喪失せる非地の信徒は、今や其愛する乳母を失ふて失
望せり、然れども恩惠深き神は、此の可憐の土民を長く不愉快なる境
遇に置き給はず、ハント、及びカルバートの三大慰藉者
は今や將に遠洋航海の途に就かんとす、[illegible]

JOHN HUNT.
ジョンハント

MARY CALVERT.
メレーカルバート

其三　カルヤードの幼年時代と結婚

カルヤードの幼年時代と結婚

道念純潔にして熱心なる信仰を有する、基督教の記臆すべき薫香の證人ゼームス、カルヤードは、二千八百十三年十月三日、英國ヨークシヤ州のピックリングに誕生せり、彼の名は美以教會の年會に於て其の名聲高かりしが、或るヨークシヤアー人に依て附けられたりと傳ふ、彼れ幼少なりし時ヨーロルドシの學校に於て始めて教育を受け、其後全處の郵便局長ジョヤンジ、バトンビーの讓る所となり、弟子の禮を取りて其門に入り、拮据勉勵修養怠るところありしも、爾後不幸なる事情は彼の可憫の青年を驅て、其修業を中止するの已むを得ざるに至らしめ、遂に一度零落して不熟練なる刷印匠、製本師、文房具商等の種々なる職に、時身を委ねるの不運に至りぬ。

然れども此の二英兒が十代の春を迎ゆる時、幸運は彼れが前途に開け

ぬ、此は久しく從事せし不愉快なる生活より幸福ある新生活に遷り變る時の來りたるをにてありき、往古幾千歳、滔々たる世上の人多くは自己以外の手を以て靈なる人を引き出すよりも、終生塗炭の苦に惱み、曾に安んじて衣食する能はざるのみならず、其一身の生命すら尚安穩なると能はざる程の悲觀の境に入りて、始めて人間本然の美質を現はし來るものなり、彼れカルバートの如きも又然り、彼れは十八の春を迎ゆるまでは、幾多の悲痛哀苦の境に往來して自己の不運を託ちたりき、されど嘆息は彼を失望に誘はずして益々前途に希望を抱かしめたり、一夜孤燈影暗き邊り、手を拱ひて既往を考へ將來を思ひ、遂に彼れ自ら悟感すらく「我れ過てり、我れは從來罪惡に陷りてありたり、其是れまで數々遭遇せし不運の如きは、要するに自家自ら自家の罪惡より產み出す仕業に外ならず」と、彼れ今を悔悟して新生命を得んが爲めに、自己の不運は自己自らの罪惡より生じ來る結果なるとを悟れり、既に悟れり、百尺竿頭一歩進んで、斯かる汚點を清淨潔白に彼れより取去る者は誰ぞや、嗚呼之を取り去る者は誰ぞや、世界の至聖は曰く「生に至る路は窄く、沈淪に至る路は濶し」と、二者孰れを取るべきか、是れぞ一時カルバートの眼前に横はりし疑問なる。

神の獨り子は曰く「求よ然らば予へ、尋ねよ然らば遇ひ、門を叩けよ然らば啓かるゝことを得ん」と、今や救ひの路は彼れの前途に開け、聖靈は彼れに宿れり、彼れ信ずらく「愛憐深き神の救ひを得て、新たなる神の美はしき子とならむ」と、一と度不善の境遇を脫却して新生命を得たる彼は、遂に堅き信仰を有てる基督信者として立つに至りぬ、是れ彼れが終生の生涯史に於て特に記憶すべき大出來事なりき。

されど人間は外貌に似ぬ柔弱なる者なり、何となれば清潔なる境遇に

處しては、人、清潔となり、汚穢なる境遇に處しては、人、汚穢となる、居は志を移すとは、即ち此謂なり、世間皆な濁り、我れ獨り清まる事嗚呼亦た難ひかな、熱心なる基督教徒となりしカルバートは、其後再び肉慾の爲に誘はるゝ所となり、最と快濶なる精神的境遇は一變して最と悲しむべき境遇となり、一時燃べるが如く成りし信仰は氷の如く冷くならむとせり、是れ實に悲むべきなり、されど大なる事業は彼れの頭上に宿る、神は彼れ一青年を召して前途非常なる働きを爲さしめむとせり、彼れ固より此一大事を心に感せざりしと雖とも、其魂には深く委托を受く、事既に然り、豈に一と度潜みたる胸奥の眞理を再び呼び起すと能はざる理あらんや、世は固より彼れに刺激を與へざりき、人は固より彼れに教へざりき、されど彼れ遂に自らを教へざるを得ず、彼れ一日獨り過ぎこし方を顧みて謂らく、「我れ一生を過てり」と、前きに與へられたる水の「バプテスマ」は、今や一歩進んで靈の「バプテスマ」は與へられぬ、失れ天職の重んずべきは其生命よりも重し、再び悟感したるカルバートは是れより一層勉舊に加ふる所あり、遂に彼れは基督教の爲に總ての勳力を其上に注がんとは決心するに至りぬ。

一千八百三十三年の五月、メールトンの住居はベバーリーに轉せられぬ、而して彼が茲に居を移して久しからず、コルチエスター及ケルムスフォードの知人は彼を招聘して貿易事業に從事せしめむとせり、彼れは行けり、茲に數年の間多忙なる貿易に從事して、暫く不愉快なる生活を送りたりき、然れども此面白からざる貿易事務は、將來傳道の上に身を捧げて大運動を爲さんとするカルバートに最も善き經驗と智識を與へたり。

當時コルチエスター美以教會の監督にヘンリー、ボーイスなる人あ

り、彼の一青年が其教會に出入するに至るや、彼れ監督の鋭眼早くも此の一青年に非常なる天禀の才能と非常なる膽力あるとを看破し、爾來該監督の寵愛は一日一日に其度を加へ行き、其懇篤なる教育は益々彼れ一英兒の才能を伸さしめ、遂にポーイス監督寵愛の極度はカルバートをして宣教師候補者に推選せしめ、一千八百三十七年五月ロンドンに開會されたる美以教會州會議に於て、彼れは殊更外國傳道者として取扱はるゝに至り、ホクストン中學校の神學部に入學することとなり、校長ジョセフ、エントウイスル、神學講師ジョン、ハンナ、舍監サミユール、ジョンスの下に在て拮据黽勉せり。

カルバートの一生涯中離るべからざる關係を有てるものあり、則ち同窓の知己ジョン、バントは其人なりき、在學中此の二青年は、互に相助け相勵みて深き交はりを結べり、其親密なるを死すとも尚離れざる程なりき、然り而して、バントはカルバートと等しく外國傳道に就て孜々汲々準備しつゝありき、一千八百三十八年、非地島派遣の宣教師より贈りたる悲報は、英國美以教會の中心を通して大感動を與へたり、而して又ホクストン中學の神學部にある彼の二青年が此悲報を聞くや、早くも彼れ剛膽なる二青年の間には、蹶然起つて非地に渡り、熱涙を揮ひ、熱血を灑ぎ驕れるものゝ頭を鞭ち、悲しめるものゝ涙を拭ひ、而して身殺さるゝも、肉裂かるゝも、其流せる血に依て、非地島に於ける滔々數万の土民の生命を贖ひ、幾多絶望者の愁眉を開いて霜然たる笑の顏たらしめんとの約束成りぬ、それ當時非地島の情態を知るものにして、進んで彼の土民を教化せんと欲する事を聞て戰慄せざる者はなし、然れどもホクストン中學の破窓の下に外國傳道に就て經營しつゝありし彼の二青年のみは、當時慥かに世人が其談話を聞いてすら一驚する非地土民の

爲に其生命を捨てんと決心したるなり、嗚呼其仁魂義膽亦感ずべからずや、思ふに世上滔々たる狹量小膽の奴輩此二人の決心を忖度する能はざるべし。

請ふ見よ、滔々たる世上の人士、多くは眼前の小利に齷齪して其良心を眩まし、人生榮華を極むるに至るを以てこよなき快樂と爲す、如何に人情の弱點とは云へ、何んぞ光風霽月の如き快活濶達の人少くして、子々屑々たる人の多きや、思へ志を立つる豈に啻に一小都會に限らむや、世界とは神が義士仁人に其天職を全ふする爲に與へたる企圖計畫の地たるを知らずや、況んや地球上太陽の輝く處、天下人目の集らざる邊に於ては、寂寥たる寒村、茅居の裡、破窓の下、孤燈影暗く、榾爐火微かに、僅かに饉を防ぎ、渴を癒すに過ぎざる、極愁極窮的の民存在する土地尙ほ多きのみならず、尙ほ人を虐殺して其肉を喰ひ以て名譽となす野蠻の土地多きに於てをや、夫れ英雄とは專制政治を覆へして立憲政治を打立てたるものに限ぎらず、將又樽俎折衝の間に於て强大國の鼻を折りたる者に限ぎらず、グリミヤの激戰、米國の獨立戰爭に名聲を轟かしたるものに限らざるなり、尙ほ進んで之を云へば、天下を驚かす大事を爲すもの決して眞正英雄の本領に非らず、否寧ろ數千年前埃及王パロがイスラエル族を虐待するに當り、モーセが憤然蹶起して、人類以上の手を藉り、絶倫の勇武智畧を以て、之を塗炭の中より救ひ出したるが如く、またストウ夫人が米國の黑奴に於けるが如く、リビングスドンの野蠻人民敎化の如く、健全なる道德の血液に充ち、精神凛乎たる神の僕にして、野蠻人の爲に同情の涙を流し、貧困者の爲に慈善を施し、所謂人生の胸奥に無限の眞理を吹き込む目的を以て、社會のあらゆる苦痛と戰ふもの、是れ豈に神の前に於て讃美さるべき偉人傑士の大なる働きにあら

ずや、彼れカルバートの如きは實に其一人なり。

ホクストン中學校の神學部にありて、非地の悲報を聞き蹶起して其民の爲に生命を捨てんとする硬骨漢カルバートは、今や英國ウエスレー傳道會社より非地に働くべく命せられたり、當時世人は皆な非地人の惡慣習を聞て戰慄せりき、然れども此の一硬漢は寧ろ其命に接して欣喜雀躍したりき、嗚呼生命を的にして一大事業を試みんとする人の如何に勇しきよ、彼れ非地傳道の命を受けて久しからずして、其許嫁の妻メーリー、フヲーレルに遇はん爲めバッキングハムシイアーに下れり、此は今後慘酷なる非地人中に住居して、ともに幾多前途に横はる辛酸を嘗め以て其可憫の土民を救はんとを誓せんが爲めなりき、されど當時種々の事情は二人の間に墻壁を立てゝ其本意を遂げしめざりき、ソロモンは曰く「善良の妻は神より來る」と、加之人間は他の己れに類したるものと交親するに非れば、其の性分の發達を完ふする能はざるとアダム、イブの原始時代よりして然り、所謂古より人類は獨居もて宜しからずとは誠に千古の確言なり、事理既に然り、聖靈は此カルバート夫妻の上に宿りて其配合を全からしめざる理あらむや、吾人は喜しき時の來る近きにあるとを信ず、然り而して、將來カルバート事業の成功は、內に其良妻賢婦ありて能く其夫を助け以て內顧の憂慮なからしめたるに歸せずんばあらず。

抑も此のメリー、フヲーレル女は一千八百十四年、英國バッキングハムシイアーのアストンに生れ、幼少の時には多病なりしも、元來此女信仰に厚く、精神慥かにして、能く萬般の煩悶に打勝つ質に富み、殊に耐忍力に强きは彼の女の長處にして、其將來櫛風沐雨の困難に堪へ、一大事を成し終る英雄らしき性質は、其夫カルバートと共に幼年時代より發露

したるを見る、而して彼の女を生みし母親は博愛義俠なる基督信徒にして、其性質は利發敏捷と云ふよりも、撓まず屈せず一事を成し遂げざれば止まざる質の人なりし、其家庭や何時も和氣靄然として美はしく、其愛女フヲーレルを薫陶するや、常に「人間の責任」と言ふことを注入するのみにして言他に及ばざりしを以て見れば、如何に起居常に人生天職の重んずべきかを悟感し居りたるかは即ち察知せらるべきなり、彼れは實に基督教徒信仰の粹に達し、其教理の尤も大切なる部分に通したりしなり、然り而して、其一生涯の長日月は多く祈禱に費され、就中其愛女が一生涯の間に「多くの改宗者と殖民人を見るに至るまで、耐忍して信仰を養はんことを祈りたる如きは、他の及び難き所なり、それ親の性質は其子孫に遺傳すると往昔より然り、愛女フヲーレルが剛膽能く大難に堪へ忍ぶ質を有せるは偶然に非ず、嗚呼此婦にしてカルバートに嫁

が在とす、其前途實に頼もしきかな。

一千八百三十四年、惡疫は非常に流行して、英國の社會上下を問はず夥しく之が犧牲となれり、就中フヲーレルの故郷バッキングハムシイアーの如きは市街村落の別なく甚はだ猖獗なりき、之れが爲め當時此地の信者は殊更祈禱會を開いて熱禱せり、此會に臨席せしキリク氏は記して曰く

一千八百三十四年十月八日、余はバッキングハムシイアー州のバックランド村に開らく祈禱會に臨む前、アストンに在る親切にして慈善深きフヲール嬢の一家を訪問せしに、當時此地方は尤も惡疫に惱まされつゝある事を見出せり、故に禮拜堂に至るや、時の現象に就て適當の演題と考へしを以て、イザヤ書一章の七、八節並にアモス書四章の十二節に就て一場の感話を爲せり、說教は終り

ぬ、次で祈禱會は開かれたり、第一に祈を捧げし者はフヲーレル嬢なりき、彼は眞心と熱涙を以て、速に總ての民が悔改めて救はれ、其熱實なる心を通して神と共に平和あらむとを嘆願せりき、余は今まも記臆す、其時彼れは實に聖靈に充されたる如く見へしと。

彼の女が信仰に厚き豈に只茲に止まらんや、安息日以外の日に於ては、貧民を茅屋の裡に訪ね、病に惱める者を慰め、終日孜々として唯之れ勉めたり、彼れの如きは實に葡萄園の忠實なる農夫なりき。

夫れ神を信ぜずんば人を信ずる能はず、死を理解せずんば人生を理解する能はず、希望を天に放たずんば地に繫ぐ能はず、覺り來れば、信仰は人生の意義を了解するの關鍵なり、而してフヲーレルの如く堅き信仰を以て人生を解す、其信仰は生命の力なり、其所謂燃へるが如き信仰は、將來非地に於ける大困難を排斥して大成功を見るの基ひなり。

人の獨居せんが爲に生れ出でたるに非ざるとは、己れの親愛委任すべき者に、慰められ、統卒され、占領せられんと思ふの念隱微の裡に切なるを見て知るを得べし、人既に自ら自己に類したる者と兩々相扶翼すべき天則を有す、此天則に由て作られし幸福喜樂のホーム優美神聖のホームは、終日世間に奔走して疲れ果てたる征夫に言ふべからざる慰を與へ進んで明日の事業に着手すべき新生命を與ふ今斯かるホームの必要を感ずるものありとせば彼れ非地の寂寥たる、而かも四面皆敵なる異域に働かんとするカルバートの如きは切に此を感ずるもの、皇天上帝豈に彼れ冒險家に一の慰藉者を與へざらむや。

然り天の成せる配合は、一千八百三十八年三月、遂に彼の淑德あるフヲーレル勤勉なるカルバートの間に「スイート、ホーム」を形造らしむるに至れり、而して結婚の後ち僅かに一ケ月カルバート夫妻、ジョン、バント

ゼー、ジャガー其他各新傳道地に派遣せらるゝ教役者は、其れ〳〵行李を整理し、書狀を發しおどし遠洋航海の準備完整するに至り、火船を驅つて波濤數千里のニユー、ソース、ウエルスに向つて快走せり、見渡せば蒼海渺茫、山おく島おく樹なく家おし、只夕陽蒼波と相映じて乾坤畫ける如く、涼風颯々として心氣爽快、是れぞ長き航海中彼れらの慰藉なる、其年の八月彼の一孤舟は紅暾曉霧を破てシドニーに着しぬ、船は茲に投錨して數日碇泊せり、乘船者一同は洋々たる太平海の長き航海中、波靜かに、風穩かに、何人の支障もおく到着せし感謝として、草樹の綠色濃かにして、旭光の影麗かなる、眺望佳絶おるシドニー港に近き野原に集會を開きぬ、カルバートは熱心おる感話をおせり、偶然に起りたる此集會は、彼れ冒險的敎役者の働きの上に、其希望を貫徹すべく神の印章を其の心底に各々押附られたる如くおりき、然り而して、此一小集會に於て識らず覺へず發露したるカルバートの熱心は、將來其夫妻が非地島に於て福音の凱旋を見るに至りし前兆おり。

此の感謝會が開かれたる翌日、長き物語を含蓄せる一片の書信は、嘗てタスマニヤよりシドニーに移住せし可憫おる一青年より、飄然カルバートの手に來りぬ、只此の一片の書信は我が讀者の信仰を養ふに尤も利益おるのみおらず、亦た以て世上未だ神を知らざる人を益する尠少にあらざるを以て、吾人左に之を述ん。

彼れ一青年の贈りし書翰の要旨を見るに、彼はタスマニヤより遙る〳〵シドニーに來るや、何者の惡漢ぞ、此孤客の金囊を盜み去り、懷中一片の金錢だもおくおらしめぬ、人は異鄕に孤客とおりて金おき時程心細きはおらず、彼れ一青年は此必要なる金を盜み去られたるなり、客舍に宿らんか宿料なきを如何せん、パンを購求して飢渴を凌がんか懷中冷々

として一錢あきを如何、旅は路連れ世は情け、人に救助を仰がんか未開の民情けを氷の如く見做すを如何せん、彼れ遂に窮して爲す所を知ず茫然自失、眠れるか眠れるにあらず、覺めたるか尙夢の如し、頭を上げて蒼空を眺むれば、明月は半天に掛り、空高ふして、氣清し、月は昨夜も今夜と相同じ、されど我身を顧みれば、昨日の我れ、今日の我れに非ず、彼れは玆に浮沈の定めあきを覺りぬ、而して自己が苦しむは之れ罪惡の結果あらめと斷定しぬ彼れは自殺して其罪を贖はんとせり、彼れ一青年の書信は斯かる事實を記載してカルバートに敎へを仰ぎしありされど其悟感は皮相の悟感ありき。

機一髮、此青年が恐怖すべき企てを爲す最中、カルバートは彼れに眞理を吹込んで其妄想を破れり、カルバートは敎ゆらく「神を信ずる事に依り汝罪を贖ふとは、自殺して其罪を贖ふと、孰れか高尙にして孰れか幸福に且つ永生あるかを考へよ、而かも聖書は記して、汝萬世界を得るとも若し其生命を失はゞ何んの益あらんやと敎へられたるに非ずや」と、青年は心を平かにし、亂れたる神經を靜かにして之を謹聽せりき、然り而して、說敎者一片の忠告は尤も大なる感動を彼れに與へたるあり、彼れ謂へらく「我れ千里天涯の孤客となり、今ま不幸にして自ら死するは善し、されど顧みれば故鄕未だ老たる父母存して、居常煙波渺茫たる空を仰ふぎ、空しく泣き、空しく呼びて、我を懷かしく思ぼすらん、然るを我れ今ま求めて死す、不孝之れより大あるはあし、況んや贖罪の法他に現在存するに於てをや、しかゝ神を信ぜて前後の策を講せんには」と、愚痴の考へ旭日に霜の消へ行く如く氷解して、遂に熱心なる神の僕となるに至りぬ、故國に在りて憂へ悲しみつゝありし父母之を聞きて如何に喜びしぞ、後ち彼の青年がカルバートに遭遇せし時語りし言葉に曰く

「若し彼の時貴敎師なかりせば、余は今ま現世に居らざりしあらんに」と、彼れ一青年が悔改して救はれたる光景は、カルバート夫妻に大なる奬勵を與へ、前より燃へつゝありし信仰愈々燃ゆ、非地傳道の急務を感する愈々切にありぬ。

抑も英國ウエスレー傳道會社の一行が、シドニーに寄港したる所以は、一行中のジョン、ウイリヤムを此地に傳道せしめむが爲めなりき、而して此のシドニー碇泊は尤も非地傳道者に愉快を與へたるあり、抜錨の前夜一同禮拜式を擧げて送別の會を開き、其翌朝未明に玆を出帆してヲビゲート島に寄港し、此地にも亦た傳道者と荷物を陸上げし、其れよりカルバートの一行は、嘗て熱心なる傳道者ウイリヤムが無惨の最後を遂げたるエルロマンカに向け快走し、一千八百三十八年十月二十五日、シドニーを發して非地に向へる傳道船はエルロマンカを去り、其十二月非地のラケンバに到着せりき、而して非地全島に於ける傳道上の悅ぶべき事、悲むべき事、失望すべき事、將た其終局の福音凱旋に就ては、請ふ次章より精密に記載して讀者と共に樂まん。

「若し彼の時貴教師なかりせば、余は今ま現世に居らざりしあらんに」と、彼れ一青年が悔改して救はれたる光景は、カルバート夫妻に大なる奬勵を與へ、前より燃へつゝありし信仰愈々燃ゆ、非地傳道の急務を感する愈々切におりぬ。

抑も英國ウエスレー傳道會社の一行が、シドニーに寄港したる所以は、一行中のジョン、ウイリヤムを此地に傳道せしめむが爲めなりき、而して此のシドニー碇泊は尤も非地傳道者に愉快を與へたるあり、抜錨の前夜一同禮拜式を擧げて送別の會を開き、其翌朝未明に玆を出帆してチビゲート島に寄港し、此地にも亦た傳道者と荷物を陸上げし、其れよりカルバートの一行は、嘗て熱心なる傳道者ウイリヤムが無慘の最後を遂げたるエルロマンカに向け快走し、一千八百三十八年十月二十五日、シドニーを發して非地に向へる傳道船はエルロマンカを去り、其十二月非地のラケンバに到着せりき、而して非地全島に於ける傳道上の悅ぶべき事、悲むべき事、失望すべき事、將た其終局の福音凱旋に就ては、請ふ次章より精密に記載して讀者と共に樂まん。

其四　ラケンバの傳道

カルバート嘗て英國にあるの日天を仰いで嘆じて曰く、文明國に於ては幸に眞正の宗教行はれ、敬神正義の念深きも、悲ひかな彼の煙波渺茫たる太平洋に散在せる、非地に於ける蠻民は何人か教を傳るぞ、余は日夕野蠻人が罪に唸くの聲を聞けり、余は起居常に彼等が救を呼ぶの叫びを耳にす、我れ何ぞ彼等の亡ぶるを傍視し得んや、盟て蠻族傳道の任に當らん」と、遂に彼れは白皙人種の未だ夢想だに爲しがたき蠻地に身を置くに至れり。

カルバートは前途幾多の希望を抱いてラケンバに着せり、當初先づ茲に住居を定めき、而して何によりも第一に必要なるものは非地人に理解され易き言語なりき、然れども其教師を得る容易にあらず、されど其後辛ふじて之を研究することを得、六ヶ月の短時日は彼れをして畧ぼ土

MR. CALVERT IN PERIL.

ペリルに於けるカルバート氏

語を解するに至らしめたり、彼は非地傳道のステーションをラケンバと定め着々他に其計畫を擴張せんとは決心しぬ、ラケンバに彼れの一行が到着してより九十日目、始めて他に傳道を試みんとせりき。

然れども百哩餘の面積と二十四島に圍繞せらるゝラケンバ附近三十餘の小村落小市街に通せんとするは誠に困難の業なり、何んとなれば位置は絶海の孤島にして、地は未開不耕の地、人は猛惡にして自尊の念深く、古來唯一地方に割居して他と交通せざりしかば、町と町と、村と村の間に通路なきのみか、該島に於て必要なる貨物を運搬する運送業者すらなきを以てなり、故に若し强ひて一の村落より他の村落に通せんとせば、勢ひ荆棘を分け入り、森林を潛りて通ずる外あるべからず、然らば海路如何にと云へば、是れ亦た吾人が叙述し來りし如く、暗礁多くして非常の危險を冒さゞるを得ず。

此くの如き光景なるが故に、非地傳道擴張の目的を達せんと欲するは容易の業に非ざるあり、カルバートは茲小なる教會に圍繞せらるゝ一小家屋に己のが故國を形造り、其土民の風俗習慣言語を研究しつゝ暫時閑居せりき、然れども此の一閑人は隱然土民間に微力を伸ばしつゝありしが、此小社會以外、則ちカルバートの住所以外、土民の殘忍なる處行は爾來數々彼れ白人に迫害を爲すに至りぬ。

閑人にして閑人にあらざるカルバートは、斯かる殘忍の異邦人に逆ふて勇敢に立脚せりき、其腐敗せる人民の詭計並に惡意の實行を豫防しつゝ經營企畫せると、恰かも往昔ヘブライの三童兒が信仰厚き從僕と共に、火氣猛烈なる煖爐に投せられむとするに當り、善良なる一偉人が自我を顧みずして之を救護したる如く、彼れは殘忍極まる食人々種中にありて、己れの身を捨て其民を罪惡の淵より救出さんとせり、此間カルバート夫人は、土語の研究を爲す側ら學校に出でゝ信者の兒童を教育し、而して其秀でたる音樂の才能は、いまだ主なる神を知らざる土人を教導する爲に用ひられぬ、之を要するに當時夫人は全島に於ける憐れ優しき女子中の主婦の如く、其位置を卑くし、其風俗を貧ふし、其言語を同ふし、以て彼の墮落せる風俗習慣を通じて彼等の品位思想を高めしめんとせり、此の如く彼は言語に於て實行に於て、其夫の大事業の上に己のが全力を注げり。

されど頑固なる小盜的土民の惡慣習は、爾後傳道者の家に種々の不自由を與ふるに至れり、而して敏捷にして狡猾なる彼れ土人は、其非行の露顯を遁れんが爲め、或時は外貌を粧ひ、或時は言語を巧にして其汚點を暗まさんとせり、見よ、種々なる器具は交換の美はしき言葉の下に紛失し、加之彼等は尙ほ之を以て滿足する能はず、純粹なる强盜的企てす

ら爲すに至りぬ、或る朝の事なりき、一の失ある穴はカルバート住家の蘆壁を破つて開かれ、此處より衣類數十點を竊取されたる事ありき、而かも彼等の奸智に巧なる、途中尋問に遇ふ時は、其竊盜品を隱蔽する爲に大なる石と摺り替へて其場を遁ると、然り而して、時の管理人たる酋長は此惡事を毫も咎めざるなり、ソロモンの箴言に曰く「義者の光は輝き、惡者の燈火は消さる」と、眞乎斯かる悲しむべき、將た憎むべき現象は久しからずして止みぬ、爾來カルバートは奮勵一番、是れまで彼れ土民に對する恐怖を取去り、勇氣勃々、寧ろ蒙昧の民を早く救助する決心を以て、將又正當なる土語を解する智識を得る希望を以て、續々訪問傳道を始むるに至り、土人の怪疑茲に忽然氷解し爾後大に信用を得るに至れり、抑時運の至るや、前に困難なりし事も容易すく成功するものなり、斯かる機運に乘じて相互の補助並に依賴は、傳道者と人民間に行はるゝに至れり、是れ實に相互の利益なりき。

今や此の如く人民と傳道者との交際は平和に行はれんとするにも拘はらず、ラケンバ王はカージルが傳道せし時よりも、今まは其信仰冷却して、「ローッ」則ち宣教師に對して寵愛の意向を示さゞりき、否な、寧ろ彼れは罪なきカルバートに數々憂患苦惱を與へき、されど寛容なるカルバートは、忠實に王が眞理を受け容るゝに至るべく勸告を怠らざりき、それ迷へるものは非常なる警醒の機會に接せずんば內なる人を呼び起す能はざるものなり、彼の數々眞理を吹き込まれたる王は、頑として自說を取つて動かず、尙ほ基督教に反對せんが爲に其壓制權の總てを注げり。

昔しはキリストエルサレム城を望で母鷄の雛を翼の下に集る如く、人の赤子を集めんとせしと幾度ぞや、然るに彼等は之を好まざりき、と嗟

欺したりカルバートのラケンバ王に於るも理は一なり、王は傲然として尙は義士を壓せり、彼れ何時まで卑屈に安じ甘じて地を嘗めんとするか、夫れ人心の善惡は外面に由て知るべからず、宜く之を內心に由て判ずべきあり、王の非行も其外部の擧動こそ惜むべけれ、若し其內心に訴へて心底の上帝を外に發現することを得ば、彼も又善人たるあからむや、故に一の手段を以て其剛性を和ぐるは、また是れ眞理に誘導する「臨機の策」なり、カルバートも旣に能く之を知る、或時彼れはツイ、ナヤウ王及其兄弟トキを欺待して問ひけらく「ナッサンギャラウの人民は宣敎師を得ることを望むや否な」と、また曰く「假令彼の人民にして福音の宣傳を望ずとも、若し王及兄弟にして傳道を許さば、不肖は銳意熱心の働きをなし、其人民が現在に於けるよりも、將來忠實に總ての尊敬勞力貢稅を王に献ずる民とあさん」と、惡意に充てる王は、今ま正しき道に傾かんとせり、彼れ謂へらく「基督敎は我が同胞に善良の敎あり、此宗敎に由て吾々が希望を充たすに足る故に」と、今や本來の精神は發露されて信仰の絲口は立んとせり、幾度か彼の抵抗に就いて、左顧右眄越趄逡巡したるカルバートの喜び如何ほどありしぞ、何んとあれば此頑固なる王の迷信を破ると破らざるはラケンバの傳道に大關係を有すればあり、而してナッサンギャラウの傳道は許されてカルバートは該地に向へり、然れども奇怪なる現象は突然此處に顯はれぬ、彼がナッサンギャラウの市街に達せんとするや、ツイ、ナヤウ王の使者として二名の婦人は早く彼地にありき、而して此使者は基督敎嚴禁の命令を所持し、其命令に抵抗するものは何人と雖ども苛酷なる刑罰に處すべく命ぜられぬ、是れ豈に奇怪なる一大現象に非ずや。

カルバート謂へらく「此命令や、ナッサンギャラウの土民に非常なる恐

怖を與へ、福音宣傳に就て不幸なる結果を來すべし」と、彼れは之に就て一と度は喫驚憂慮せりき、然れども困難に遭遇して無頓着なる此の一硬漢は、猶ほ天を仰ひで茫爾たりき、時機未だ到來せざりしか、幸運未だ前途に開けざりしか、旅行は引返へされぬ、傳道の手段は一變せられたり、彼はラケンバに於ける自已の住所に近きトンガ人の從僕となり、暫時茲の主人を懇篤に導きたる後、再び土人の教員としてバトワに行けり、此時に至り非地人の長所とも云ふべき狡猾なる詐僞的王の行狀は稍や改るに至りぬ。

カルバートは其れよりラケンバの南東殆んと四十哩に位するヲチアタに渡り、此處に居を移して熱心なる働きをなし、其結果として多くの改宗者を得、遂に教會と學校は打立てらるゝに至れり、然り而して、各住民の注目を引く事業は多く基督教徒の手に由て成されき。

一千八百四十二年、受洗者は一日一日に其數を加へ行き、現在の信徒は教會に溢るゝはどに至り、一の必要と一の希望は、遂にヲチアタ全島民を容るゝに足る一大禮拜堂を營造するの幸運に至れり、ヲチアタの土人は、此の如く勉强なる、起業的なる、殊に卓越したる才能ある、而かも大膽なる土人なりき、彼等は唯一個小なる獨木舟を以てすら、權力强き酋長の抵抗を防ぎつゝ尙ほ富源の島民と交易をなすとあり、而して此の有爲多望の島民は、時日を經過すると共に漸々擧て基督の臣僕となるに至り、爾來到る處の人民と交りを結び、到る處の人民に福音を宣傳するに至りぬ。

斯かる日出の勢ひを以て、福音はラケンバとソモソモ島より半哩に位せる有望の地、バナンバラヴに今を傳播するに至れり、此のバナンバラヴ島民と彼のヲチアタ島民は密接の關係を有する者にして、則ち彼の

ラケンバ人が相互の物品を盗みあい、將た互に嘲笑罵詈する如きにあらず、其思想界に善良の德を植附る同一の宗敎を有す、是れ非地群島中此の兩島民が、其風俗習慣藝術才能に於て他に卓越する所以か、然り而して、一日の勞働を休めば則ち奇怪なる舞踏と奇怪なる唱歌を歌ふて徒らに光陰を費せし土人は、今や基督敎と人間の關係に就て研究し始めぬ、カルバートは始め人が罪惡より永生に入るには、懺悔の尤も必要なるとを敎へぬ、エムブカラウの如き稍上流の人々は、遂に福音を受入れて神を信ずるに至り、聖靈も亦た彼等の上に宿りたりき、されど異敎（セーメン）の僧侶並に酋長等は大に之れに反對して脅迫したりき、然れども一と度眞理を認めて燃へるが如く神を信ずるに至りし信徒、豈に瑣々たる迫害の爲に其信仰を冷さんや、彼等は確乎として其信仰を保持し、只管義に生活して孜々神の恩寵に預からむとを勉めき。

バナンバラブに福音の信せらるゝに至りしこと此の如し、彼れ冒險宣敎師は今や前後の經營を爲さんが爲に踵を回らして再びラケンバに歸へれり、バナンバラヴの信徒は一の敎師を失へり、其失望悲哀如何はどありしぞ、吾人は之を想像して眼前其光景を見るの感あくんば非ず、事態既に然りと雖ども、彼の信徒等は尙ほ一の幸福を有す、此は熱心燃ゆるが如き信仰ある敎會員ジョセフ、エムブカラウのあればなり、カルバートが一と度此地を去るや、エムブカラウは一層元氣を勵まして未信徒に勸話せり、然り而して、聖なる神の恩寵は此義俠熱實なる信徒の進路に愉快なる希望を與へ、彼は益々豬突猛過の勢ひを以て周旋奔走せり、基督敎勢焰の將來輕んずべからざる、這般の一事實證し得て餘りありと云ふべし、況んや其敎役者信徒たる者總て決死の勇士たるに於てをや。

されど人事兎角蹉跌し易し、一度愁眉開かんとすれば又悲哀の襲ひ來るは人生の常理、所謂一利一害とは則ち此謂なり、人もとより敵あるを欲せず、然れども、到底敵なくして已むべからず、今や慘酷なる抵抗の戰は演ぜられんとす、バナンバラヴを分割して二區畫とせしヤロ及ロモロモに於ては、異教徒と基督教徒の間に非常なる軋轢を生せり、異教徒は曰く「機會乘ずべし」と、猛獅暴虎の如く暴れたる彼等は、旗鼓堂々として西より東より北より南より攻め寄せ來り、殘忍の刃は幾多基督教徒の頭上に痕跡を止むるに至りぬ、此時正義の味方は曰く「惡に逆ふて戰よりも、義の爲に一時難を避るに若かず」と、然り平和なるは身の生命、反逆は亡びの本、義士の決心殊勝なるかな、彼等は遂に逆徒の爲に追はるゝまに〳〵バナンバラヴを隔離すること九十哩ムニア孤島に逃亡して殖民地を開き、彼れ忠實なるエムブカラウを頭に戴いて自由なる樂園を作り、以て孜々汲々として信仰を養ひ神を樂しみぬ、然り而してバナンバラヴに於ける此信徒の殘酷、追放、虐殺に堅忍したる勇氣は、其主義精神を確く取て動かざるに至らしむる地盤たるのみならず、亦た將來福音の大勝利を見るに至る根源となれり。

抑も迫害の道具は只血と刃とのみと思ふ勿れ、平和の方面に於ては平和的の迫害も是あればあり、見よソモソモの王ツイキラキラが貢稅を徵收する爲にロモロモに至るや、土人は盛大なる歡迎會を開いて之を饗應し、基督教徒も亦た之に參列せんと欲して却つて虐待されたるに非ずや、吾人思ふに其之を虐待したるは理りなり、何んとなれば起居常に基督教徒を脅迫し虐殺して、其肉を喰ふ彼れ殘忍の王、爭かでか其怨敵を宴會に參列せしむる如き優しきことを爲さんや、彼等畢竟無感覺無慈悲、無常識、沒人情の食人々種なれば其餓鬼道を演じて微笑する尙

は固より其處あり、然れども眼あるもの爭かで泣かざるを得ん、情ある者爭かで憮然たらざるを得ん、況んや彼の感じ優しく、惠み厚く、慈悲博愛なる基督信徒に於てをや。

夫れ人は樣々なり、本來の靈心を暗まして兄弟の肉を屠り、寤寐ともに之を喰ふて得々微笑むものあれば、亦た月洩る賤が家に危坐正念して神を樂しむものあり、世は樣々あり、人も亦た樣々あり、請ふ見よ、一方に於て殘忍の處行之れ事とするバナンバラヴ人あれば、他方に於ては渺茫たる蒼海に舟を操つり土人の食料たる果實を拾ひ、其間暇を以て、神を研究せんと欲する優しきバナンバラヴ人あり、此島民の總てが偶像教より唯一無二の宗教に改宗せんとする晩年、彼の海に流るゝ果實を拾へる舟夫は、其孤舟に宣教師を招聘して安息日を迎へんとせり、然り而して、「バロロ」祭が行はれし一千八百七十四年及一千八百七十五年の

兩年は、彼の數多き小舟の舟夫に向つて尤も福音宣傳が試みられたる年なりき、抑そも此のバロロ祭とは往古より孤舟の民が神とし信ずる奇怪なる蟲を祭る日にして此蟲は細長きこと恰かも素麵の如き小なる、海蟲なり、其大なる者は一ヤード、其小なる者は一インチ、躰は夥多の斑點と多くの脚を有す、バロロや蒼茫深々たる海底に生存し、一年僅かに二度海の表面に浮出するに過ぎず、一は寒さめ月たる十月の中旬最と小なる形容に於て顯はれ、一は神樂月たる十一月の二十日より二十五日の間最と大なる形容に於て顯はれ來る、第一期發生のものをリッル、バロロと云ひ、第二期發生のものをグレート、バロロと云ふ、而して土民は蒼空に掛る惑星の位置が變化するを見て斯蟲發生る時節を知ると云へり、蓋し之れ文明國に於ける天文歷數の學なきが爲めなるべし。

其五　正義と殘忍の戰

吾人は今飜つてラケンバに在るカルバート傳道の光景を再記するの喜しき時に着しぬ、夫れ奇怪なる談話と殘忍なる物語は非地人の專有物なり、彼れツイ、ナャウ王の娘タンギシが改宗するに至りし物語、豈に讀者をして抱腹絶倒せしめざらむや、彼女が齡二十の春を迎ゆる時、危險なる疾病は彼を掴んで黄泉に入らしめむとせり、猛きこと狼の如き王も、自已の娘が死は痛しきか、一夜孤燈影暗き邊其愛子の顏容を熟々眺めて哀倒せりき、當時王は悲痛哀苦の餘全島の慣習により、娘を祭壇に運び行き、以て彼等の信せる野蠻神の憤怒を和げ、而して愛女の恢復を謀らんとせり。

島の全市街に在る種々の食物は集められて祭壇に供せられたり、夥しき「ターロー、ルート」は焙れて九十の大なる布頻(食物)と共に捧げられたりき、祈禱は成れたり、されど偶像教の祈禱何の應驗やある、吾人は今此處に布頻に就て辯解を與へ置かざるべからず、布頻は非地土民の食物中最も賞美せらるゝ者にして、當初「ターロー、ルート」の葉を焙りて採碎き、後ち之を椰子實の粉に混合し、砂糖液にて煮立てゝ製するもの、而して此混合物を入るゝ鍋樣の器は、甘蕉(バナーナ)の葉を多く合して堅固に作りたる者あり、然り而して、彼れ布頻の大なる者に至りては殆んと二十一フイートありと云ふ。

斯かる準備が成さるゝ間、タンギシ女は刻一刻危篤に頻しつゝありき、其噂を耳にしたるカルバートは其平生の怨敵たるをも顧みず、急行藥を携へて第二の訪問をなしたり、此時野蠻教の僧侶は曖昧なる妖術を行ひつゝ娘の身躰を摩擦しつゝありき、王は其側に跪いて愁然自失の体なりしも、彼れカルバートの入り來るを見るや、如何にも力を得て鼓

舞されたる如く、惶忙しく起ち、上りて曰く

「教師よ、娘の病は甚だ危篤あり」……「救濟の道あさや」

と、宣教師は威儀從容、慈善の眞心を其優しき顏に發露して曰く

「大公余が眞心よりせる醫藥を用ひず、却つて曖昧なる偶像教の僧侶を信じて妖術を行はしむ、何んの効驗か之れあるべき、機一髮を容れず、死は尙ほ彼女を急ぎつゝあり……」

と、「死は尙ほ彼女を急ぎつゝあり」唯此の一言は、王の鼓膜を打て迷神を醒さんとせり、當時カルバートは、王が偶像崇拜の念を去つて、速に罪より救はれんことを願ふ心の切なる外、彼が胸中一點の惡意なかりき。此の如く非常の悲哀に陷いりたる王は、彼の一言に動されたりき、同情は今やカルバートの說に表せられ、文明國理化學の發明に由て製せられたる藥品は患者に與へられぬ、而して病める者は之を服用して、眠れるが如く又死するが如く、判斷は何れとも就かざりき、然れども呼吸は絕へてありき、王は暫時にして絕叫すらく「教師は我愛兒を殺せり」と、王は憤り異教徒は怒れり、「教師を殺せ」との叫聲は處々に聞へたり、嗚呼カルバートの位地危機一髮。

然れども彼の心底の淸きことは、淸淨なる溪川の泉よりも淸く、蒼空に掛る十五夜の月よりも淸かりき、既に彼れには惡意なかりき、惡意なきが故に毫も敵を恐れざるなり、否な恐れざるに非ずと雖ども屈せざるなり、故に彼は這般の失敗に尙ほ懲りず、人の一命を救んとするの情切にして、再び調合適當なる醫藥を携へ王の家を訪問せり、藥瓶は王の從僕に渡されたり、彼は之を渡すや否や逃るゝ如く我家に歸りて、結果如何にと世の風評を待ちたりき、其翌朝に至り風說は傳ふらく、ダンギシが病氣稍や回服の模樣あり」と、是を耳にしたるカルバートの喜悅如何な

りしぞ、暫時にして王の使者は來れり、其用旨は何ぞ、

「後ちに惠まれたる醫藥は大に効驗を奏しぬ、今又次女赤痢に惱む願くは再び良藥を與んことを望む」

と、道義に厚きカルバートは是れに答て曰く

「大公に余が滿腹の尊敬を呈す、來旨の趣を了承しぬ、然れども余は大公の一家に多く藥品を贈るを望まず、如何んとあれば前夜誤つて大公最愛の一女を死に至らしめ、今又誤るとあらば、是れ我が宗教の主義精神に反すればあり」

と、此回答は却つて王に感激を與へ、王は再び辯解の答詞を送つて頻りに醫藥を要求せり、而して遂に送られたりき、然り而して「此の間ダンギシは、彼の妖術と犧牲とを以て熱心に本服を祈りつゝある、野蠻宗の僧侶に看護されつゝありしと雖ども、病は日に重るのみにして何んの應驗あかりしかばツイ、ナヤウ王の迷信は再び茲に醒むるに至り、遂に彼の僧侶を謝絶して、親子ともに慈善深きカルバートを賴るに至りぬ。

一千八百四十二年八月十一日、彼れが故郷英國の兄弟に贈りし書信の大要に曰く

……彼女(ダンギシ)は漸次快愉に至り、數日前より坐臥共に自由に食事も可なり致居候、王女は申候、「小妹は最初何の理由なく宗教を嫌ひ、時には虛言も吐きたる事もありしが、今日は過去の行狀に就て誠に恥しく、若し彼の大病にて死しなれば、恐く宗教の何者たるを知らずして、不幸に終りしならむ」にと、當時最も改悔致居候、彼女は其後綴字書等を學び、近來は書物に由て善き智識を得候、過る火曜日小生は彼女と別れしが目下甚だ健全に御座候、然しダンギシが彼の時死亡せしならば、遂に王の一家に基督教は入らざりしな

らむ……

三週間以來王の小女は亦た病氣に罹り居り、或日の事とか、此可愛の一女は、傳道者の家に連れ行け、而してカルバートさんの看護の下に服藥させよと、其母に泣き迫り候由、誠に可憫のものに御座候、然し其後疾病は日に重り、晝夜煩悶に惱されて寐ねず、頻りに宗教を愛着せし由にて、王は「眞正恵み深き神を信せよ、若し汝等の希望を達せんと欲せば」と勸話致候由傳聞仕候、然れども運命の來るや詮すべ御座なく、二三日の眞夜中忽然永眠致候、其際王は家族を勵ますべく招き候に付、直ちに參り埋葬の準備に取り掛りしが、母親は愁歎云ふべきよふなく、「マタイカ何處へ行くか」と絶叫致し誠に憐憫に感じ申候、其より死躰を教會に引取り、是れに油を塗る際の如き、王の一家族は亦た茲に在りて、其母親は死せる子供が蘇生するかの如く、眠れる眼を明け、閉る口を開き、唸き叫びて室中を狂ひ回り殆んと六時間喧々囂々擾きは止み不申、今に其光景眼に留り忘れられず、此の如き次第なるが故、當時余の如きは、彼の母が非地土民固有の習慣に依り、埋葬地に隨從して死者の頭部を剃り其死躰を燒き捨てはせぬかと密に懸念致候、而して彼の母親は數日にして余が家を訪ねて「死人は歸りし」かと尋ね候、愚も又甚しく一笑の外無之候、然れども幾多病者を生せし王の一家族は、從前殘忍なる處行をなし居りしに似ず道を求むるに至り、現に母親の如きは、安息日には禮拜堂に出で、且つ毎週婦人の學校に來り、必要ある時は土語を以て祈禱を捧ぐるの幸運を見るに至り候……

ダンギシの疾病は今も著明なる結果を現はさゞるにせよ、將來之れが非地傳道に善良なる影響を與ふるに至るは信じて疑ふべからず、吾人

は殊に此の事實が、王の一家を擧げて基督禮拜者と成らしむるに至ることを信ずるもの、而して此一家が救はるゝと救はれざるとは、ラケンバ將來の普敎上に大關係を有するものなり、然り而して、彼れダンギシが病の爲に煩悶困苦せる時、異宗の僧侶が心を苦め思を焦して尙ほ之を治療し得ざりしに際し、宣敎師の一藥が其危篤の疾病を回服するに至りたる事實は、基督敎の神が他宗敎の神よりも人類を救ふに力あるとを證據立てたるのみならず、此一事は異敎崇拜者の迷夢を醒し就中ツイ、ナヤウ王の妻が如きは、從來の信仰を改めて此唯一無二の神を信じ、以て斯敎の爲に一大便利と一大補助を與へんとするに至れり。

されど彼れ基督の證人が、嚴重なる試みに遇ひたるダンギシを救ふとは最も困難の業なりき、何んとなれば、彼女は今ま慈愛熱腸なる父母の膝下にこそあれ、素と之れ非地王中の最も殘忍兇惡なる、而かもバウの、食人王（カンニバル、キング）タノア許嫁の妻にして、恰も猛き狼と温和なる羊を配合したるが如く、其氣風精神に於て到底相一致せざればなり、事態既に此の如し、故に其信仰を保續する如きは斷じて出來得べき事にあらず、タノア王は今ま使者を送りてダンギシを娶んとせり、ツイ、ナヤウ王は此使に接して苦心萬回せりき、然れども抵抗の効なきこと恰も支那軍の日本軍に於るが如し、勢ひ然るが故に彼は遂に其愛兒をバウに送れりダンギシは己が運命を主なる神に委しつゝバウに至れり、されどタノアの虐待は彼女をして氣色蒼然神氣頽然たらしめ、其遠く幽かに故鄕を思ふの念矢よりも急にして、遂に再びラケンバに歸へるに至れり、ラケンバ敎會の彼が友人は滿腹の喜悅を以て之を歡迎せりき、されど其健康が舊に服するや否や歸省は嚴しく促され、彼女は又虐待凌辱を受くるの己むを得ざるに至れり。

「浮草や今日は向ふの岸に咲く」、今日此處に莞爾として喜ぶ人、明日は彼處に戚々として憂ふ、嗚呼人生浮沈の常なること何んぞ夫れ此の如く甚しや、然れども聖靈の宿れるダンギシは毒手を脱する近きにありき、タノアが死して久しからず、女は其實父たるラケンバ王を訪問し、夥多の貢税及奉納物を徴収すべく命せられたり、威權赫々たる小國の小王にして親に貢税を命ずる既に不可なり、況んや子として成權赫々たる大國の大王に貢税を命せんとするに於てをや、されど機運は一變せり、此時ラケンバとバウ間に一變動は起れり、抑も前なる王は有名無實の基督教徒にして、後ちなる王は邪惡鄙陋の異教徒なりき、其何れにしても善ならざるは論を待たず、夫れ惡は義の爲に到底倒れざるを得ずとは、神の獨り子基督が後世を戒め給ひし訓戒なり、彼れ神を慕へるラケンバ王の一家族、遂に正義の大勝利を得ざらむや。

偶々トンガのジョージ王バウを訪問す、王バウ王に問ふて曰く「ラケンバの臣下は如何にバウに服從するや」と、思ふに此はバウ王の意向を探知して彼のダンギシを取戻さんとしたるなり、バウ王は曰く「若しラケンバ王にして我が要求の貢税を収めばダンギシは返へすべし」と、トンガ王は此答辯を公平と看做し、此の如くして彼女を取返さんと企てたりき、然れども事物に接して其眞相を看破し易き鋭眼を有するトンガ王は早くもバウの民が言葉を巧みにして、中途彼の女を奪ひ去らむとの計畫あるとを發見し、遂に女を其父の支配下にあるラケンバ教會の宣教師の家に隱匿して歸へさざるに至れり。

一千八百四十七年カルバートが其故郷に送りたる書信の要旨に曰く

……多の人民は流行感冒に惱され時間は多く惡疫豫防に消費致居候、王(ラケンバ王)は該病に罹りて痛たく苦しみ居り「余は恐く死

するおらん」と愁嘆し候、彼が惡疫に罹りし朝、人民は我を呼びに來り候に付急行其家に至り見れば、酋長や人民は其周圍を圍繞し、土地の白色ある反物の切れを以て病者の頭部を包み居候、熱病者の頭部を包むおそは誠に以て奇怪の至りに付、是を土人に質し候處、此は王の病死は必然に付、死者埋葬の準備おりとの辯明を聞き驚入候、土人は總て王は必然死すと申候得共、小弟の眼には死の蔭映じ不申、故に其粧飾(包物)を取去るべく命せしに、土人は之を取去り候、此時小弟は患者に眞理を說き進めしに、患者は答へて申候、私を捨て置け」と、彼は如何にも死を決したる如く有之候、然れども尙ほ三時間眞理に就て勸話致せしに、彼は尙ほ「余は死するおらん」と申居候……

此書翰に依て察するに、ラケンバ王ツイナヤウは、其後疾病の爲に惱されたるものゝ如し、されど彼はカルバートが該訪問をなしてより殆んと二年目、公然異宗崇拜を脫して、基督信徒として立つに至りぬ。

蠻徒が其頑固なる信仰を捨てゝ基督を信ずるに至りたる物語は實に玆に止らず、吾人は尙ほ今愉快なる一事實を有す、嘗て其種族と共にラケンバに移住したるレブカンの酋長なる者あり、世上傳說する所によれば、此人は斷乎たる詐僞的性質と奸計に由て巨万の富と勢力を得たりと、而かも其專橫殘忍の處行は、ラケンバ王より不義の貢稅を取らんが爲に尤も多く成されたりき、加之レブカン種族は粗暴なるバウ王とは君臣の如くなるが故に、彼はバウ王と共に同心一躰となりてラケンバに於ける基督敎徒を殘害せんとせり、機會は至れり、悲劇は演ぜられむとす、カルバート夫妻がラケンバを去らむとする僅か前、彼の猛獅暴虎の如く腥風と鮮血を見て尙ほ微笑む蠻族は、改宗者に大抵抗をなさ

んとて蜂起せり、其害惡の處行や一日は一日に濃密に、其毒氣の人々に感染するや刻一刻に沈深にして、前途幾百萬の靈を陷いれ、身を殺し、家を破り、國を害するに至るか豫想出來ざる程なりき、然り而して、信徒は之を見て喫驚し憂慮して鎭壓の謀議を凝らしたりき、然れども「カルバート」は此一大紛亂中に超然卓拔して福音を證しするに餘念なかりき、暴に對する亦た暴を以てせば其熱度や愈々增す、されど暴に對するに義を以てせば其熱度や勢ひ冷却せざるを得ず、其張り詰めたる腰や勢ひ弛まざるを得ず、聖書は吾人に戰爭の秘術を敎へて曰く「敵を愛せよ」と、夫れ愛するは和ぐる所以にして、和ぐは人間を塵埃の中より高ひる所以なり、今や彼れ冒險的宣敎師は此宇宙の調和を創造する愛を以て敵に對す、彼れ殘忍の暴徒到底敗れざるを得ず、然り敵は敗れたりき、眞理は彼等が胸奥に押印せられたりき、「レブカン」の種族は今ま干戈を斂めて神を考究するに至りぬ、されど彼等の鈍き知覺は惑亂して、一時神、神の子、眞理、罪惡等を判斷するに煩悶せりき、

然れども神、神の子、眞理、罪等の判斷に苦しみ居たる蠻徒が大變化するの時は來れり、彼等は暫時にして其罪を許諾したり、啻に之を許諾したるのみならず、尙ほ其罪を贖ふには必ず神の赦免を得ざるべからざる事をも信じたりき、是れ實に生活上の變化なるのみならず、將又其心靈上の大變化なり、爾來彼等が善を成すに盛んなる、從前惡を爲す心の盛んなりしよりも一層盛んに且つ熱心に神を信ずるに至れり、燃へるが如き信仰を有てる信徒が虐待凌辱を恐び、理想高潔、愛情泉の如き、冒險傳道者が千辛萬苦を事ともせず、福音を宣傳したる結果は此の如き美はしき實を結ぶに至りぬ、天上の光輝を受けたる彼れ改宗者が心底に潛める愛の火は、未來永刼消ゆることなかるべき歟、然り而して、爾後ラ

ケンバ地方に建てられたる壯大美麗の禮拜堂は、改宗者が自費を拋つて建築したる者ありと云ふ、ラケンバ傳道の結果此の如し、吾人は眼を轉じてヲノ島を觀察せざるべからず。

其六　正義と罪惡の戰

奇怪なる現象が現はれたるは曾にラケンバのみに非ず、非地傳道會社の巡回區ヲノに於ても現はれたりき夫れヲノ島はラケンバの南方殆と百五十哩に位せる群島中の尤も大なるものにして、非地の最南端部を形造り、而してラケンバに附屬す、此土民が基督教を信ずるに至りたる由來を尋ぬるに、當初宣教師信徒等が該島に渡りて之を誘導したるにあらず、則ち奇怪なる因緣に依りて、否な寧ろ偶然の機會に接して之を信ずるに至りたるにてありき、請ふ吾人をして其原因を語らしめよ。

非地に始めて福音が宣傳されし年なる一千八百三十五年、種々の出來事はヲノ島民を驅つて其迷夢を醒ざるを得ざらしめぬ、此の年一の事實は土民と土民を衝突せしむるに至り、軋轢の熱度の加はり行く極、遂に干戈を交へ互に殺し殺さるゝに至りたるのみならず、猶ほ戰ひの反

面には時疫非常に流行して之を惱ませし、其戰ひの勇氣は之れが爲に挫折し、寧ろ土民全躰の意向は宗教に依て救助を仰がんと欲するに至り、茲に始めて大なる供物は野蠻教の神に捧げられぬ、祈禱禮拜は嚴格に行はれたりき、然れども偶像神は何の効驗をも顯はさゞりき、土民は憤慨して之を擲棄せり、されど時疫は依然として跋扈を極め、困難は日々に增加しぬ、

恰かも善し、此時ヲノの會長ワイなるもの、其領主に貢稅を收めむとてラケンバに行き、嘗て友義島（フレンドリー、アイランド）にあるの日信徒となりて、當時非地に會長たるタカイに會遇せり、偶ま談宗教の事に及びタカイの曰く、「天地の間神は唯一にして、其神は恩寵深く、此人類を罪より救出して永生に入らしめ給ふ、人は唯此神を禮拜すべきなり」と、暗夜に燈火を慕へる如く眞理を探索しつゝありしワイは、此時始めて其胸底に唯一無二の神を

認めたりき、恰かも之れ岩蔭の草花が旭日に遇ふて嫣然微笑を含むが如し、彼は喜ばしき福音を聞て欣然たりき、彼れは夫れより此祝福なる音づれを以てヲノに歸り土民間に說き廣めぬ。

乾けるものは飲を成し易く、心の飢たる者は神を知り易し、彼の土地固有の神は民の苦楚を救ひ能はぬと慨憤しつゝありし土民は今ワイより新なる神の福音を聞きて、其飢たる心を搖撼し、遂に滿腔の喜悅と總ての信仰尊敬禮拜を捧げて之れを信せんとせり、是れより彼等は六日毎に翌日の食物を準備し、殊に宴會に用ゆる美麗珍奇の衣服を纏ひ、以て未だ確乎と知らざる神を禮拜せんとて各々集合するに至りぬ、されど茲に一の困難は、其信仰を擲棄するに至らしめざるも、進んで之を信せんとする勇敢の心を惱やましたりき、此は島民往古よりの習慣として、祈禱は必ず僧侶に依て捧ぐるに非らざれば捧げざる事之れなり、然

れども宣教師の未だ派遣されず、教會と言ふべき教會なき此島に於て、此事を成んとするは到底出來得べきことに非ず、土民は祈禱に就て商議万回せりき、然れども如何に思ひを焦し心を盡すも善良の方法は見出されざりき、詮方盡きて遂に野蠻教の僧侶は招かれたり、土民は問ひけらく「利益上新神を禮拜すると土神に阿諛すると何れか宜しきや」と、僧侶は曰く「基督教の神は、此民を救助して果して幸福に至らしむる力ありと信ずるや否や、本僧は船路は他にありと信ず、異國の神彼れ何にする者ぞ、諸君は彼れに對して自己の家人を愛する如くせず、寧ろ隣人を取扱ふが如くすべし」と、此答辯は土民の心底に滿足を與ふる能はざりき、曖昧なる信仰は尚ほ續けられたりき、爾來祈禱を捧ぐる事に就て、將又新神を知識する事に就て、彼等の熱望は日々夜々其度を加へ行き、是れと同時に宣教師の派遣されむことを渴望するや、愈々切になりぬ。

然れども此は恰かも浪避なき獨木舟を以て風濤荒らきトンガに航海をおすが如く、百五十哩を隔てゝ孤立せるヲノ島に教役者を送るとは實に難中の難ありき、されど派遣せずして已むべきに非ざれば、ラケンバに在るカルバートは使者をトシガに遣はして教役者をヲノに送らむことを要求せんとせり、航海日數、數ヶ月の豫定を以て、トシガ人を滿載せる獨木舟は其後本國に向つて出帆せり、而して此航海の中途一珍事は突然起りぬ、或日の暮れつかたありき、見上れば上層の雲は空一面に掩ふて薄鼠色の幕を敷けるかと怪まれ、墨色ある下層の雲は、團一團斑に散り相追ふて南西に走り遠く水と合し、一望凄然眺れを雲眺れを波と判別し難く、夜半三星稍々西方に傾く頃に至り、風濤愈々荒れて、舟は木の葉の如く縱横に動搖し、船員一同必死とありて帆柱に縋り船桁を抱き、其曉に至る比に辛ふじてヲノ島を隔つる殆んと五十哩バトワ小

島に漂着しぬ、一行は茲に暫らく碇舶して疲勞を休め舟の損所を繕ひ以て再び出船の準備をおしぬ、此間彼等は一の善き利益を得たり、土人は話すらく「ヲノ島の人民は基督教の神を知る、而かも其一部のものは基督は一名救主おることをも知り、當時宣教師の至りて教へんことを渴望しつゝあり」と、此談話を聞きたる使者の一行は益々ヲノ島に望みを有し、一日も早く教師を送るの運に至らしめむとトンガに向つて抜錨しぬ。

使者はトンガに着しぬ、然れども彼の地も亦た教役者拂底おりき、使者はラケンバに歸り、回答はカルバートの手に落ちぬ、其要旨に曰く「教役者は此地も拂底にして苦しむ、故に遺憾おれども送る能はず、暫時適當の信徒を養育して働かしめむことを望む」と、茲に於てカルバートは嘗てカージルに誘導されて熱心なる信者と成りし土人、而かも鋭敏利發

おる一青年イサック、ラブアタに讀書を教へ、是を價値おる地方傳道師（ローカル、プリーチャー）と成して送れり、然り而して、イサックがヲノ島に到着したる時、彼は百二十名の土人が既に基督教に改宗し、尙ほ多くの民は當時頻りに求道しつゝあることを見出しぬ、爾後彼れは此の愉快なる光景に一層勵されて孜々汲々福音を證したりき、彼れがヲノに傳道してより殆んと一年、一の傳道師は多くの聖書と雜書を携へて派遣されぬ、而して當時三つの禮拜堂は既に設けられてありき。

飜つて彼のバトワ小島に漂着したる使者がトンガより歸るや、其回答をカルバートに渡すと同時に物語りて曰く「我等が漂着したるバトワの民は、ヲノの島民が基督教を慕ふが如く、今や宣教師の來訪を熱望すると尤も切おり、願くは早く此島にも教役者を送らざるべからず」と、愛に濃厚に義に勇めるカルバートは、此新なる報告を聞きて飛び立つは

ど喜びたりき、然れども補助傳道師も無く瑣々限りある一人の微力を以て彼れは廣きラケンバ幾万の民に傳道せざるべからざるのみならず、暴虐なる土人中に獨り其愛妻を留め時々一週日より一ヶ月以上家を空けて、「ミション、ステーション」の巡回區たるラケンバ附近二十餘島に布教せざるべからざる身、既に此の如く東奔西走して日も亦足らざるのみか爭で一人の限りある力を以て十人二十人の働きを爲すことを得んや、事態既に此の如くあるに拘はらず、義の爲に自己の生命安危を顧みざるカルバートは今まバトワ傳道に就て矢よりも急に火よりも熱してありき、彼れ到底行かざるを得ず、されど其半身の酷待凌辱の間に暫時孤獨とあるを如何せん、大なる困難に接して愈々大膽あるカルバート夫人は、其迷へる夫を激勵して曰く「妾は幾多多くの土人が、心の食に飢へて惱み苦しめるを見るに忍びず、妾が一身は素より主の犧

牲に捧げたるもの故に假令殺さるゝも喰はるゝも厭ふ處に非ず、されど夫よ餘り心を痛め給ふ勿れ、惠み深き父ある神は妾を守護し給はん、若かず妾を顧みずして多くの民を救ひ給はんには」と、嗚呼此夫にして此妻あり、非地島民が將來幸福なる生涯を送るに至る、蓋し偶然にあらず。

此の如くしてカルバートは、豪膽ある妻と可憫の愛兒を全能者の守護に委ね遂に順風に帆を揚げバトワを指して快走し、海路風波穩かに數日にしてバトワに到着しぬ、彼は此處に暫時碇泊の後ち再び纜を解ひてヲノに向つて出帆せり、ヲノ島民は此報に接して甚だ喜悅し、且つ基督教が當時如何に盛んに行はるゝかを見せんとて、各人心密かに樂み合へり、而して數日にしてカルバートは到着せり、彼れは此時百餘の土人が受洗するの善き信仰を有てるを見たるのみならず、改宗者中には

最も興味ある履歴を有するもの多きを認めぬ、就中左に記載するが如きは其著明なるものなり。

ヲノの或る酋長に容貌美はしく姿優しきトボーと稱する一女あり、彼れ幼小にしてラケンバ王の許嫁の妻とされしも、生れて道義感情に強きが上に基督を信じ、其名をゼミマと改稱し、閑暇ある毎に讀書に耽りて大に智識を養ひ、爾後學校及傳道上に尠からざる助けを爲すに至りたるが、其燃ゆるが如き道義感情は多妻主義の而かも未だ神を信ずるに至らざる彼れラケンバ王の妻たるを屑とせず嫌厭の情愈々切にして遂に自己を殺して強迫的父母の契約を破らんとするに至りぬ、基督教徒殊にカルバートの如きは大に之れに同情を表し、ラケンバに歸るの日盡力してツイ、ナヤウ王を說き破り此一女を救助せんとは決心しぬ。

カルバートはラケンバを出でゝより殆んと三週間にして、己のが家に歸へり直に王に見へぬ、彼れは談話の冒頭トボーが今ま眞正の基督教徒となりて、王の妻たるを嫌厭するとの口實を以て、其要求を謝絕せんとせり、恰かも此時ヲノに於ける異教徒は、王を煽動して獨木舟の艦体と無賴の惡漢を送りて、ヲノの基督教徒を討伐せしめむとせり、機一髮カルバートが此事を耳にするや、彼れは急行此地に於て普通の捧物たる鯨の牙を以て王を訪問し、ヲノの基督教徒を殘遇せんとするの非あるを辯破せり

カ「王は今ま ヲノに航海の準備中ありと聞く、思ふに此はゼミマを强迫して伴れ歸へらむとてならん、余は斯く成すを欲せず、唯彼女を一信者としてヲノに置かんとを願ふ。

王「否な、吾れは唯貢稅、シンチット、織物、蚊帳、蕃、眞珠貝を得んとて行

くのみ。

カ「果して然らば、王は何故に無賴の惡漢を多く伴はるゝや、若し只貢稅のみの目的なれば、船夫にして足れり、然るに事茲に出でざるは、實に怪中の怪なり。

王「彼等は亦た善良の船夫なり、吾れは彼等を使用して浪費を節約せんと欲するのみ。

カ「王よ、余は王が冒險を成す前に斷乎信者とならむことを勸告す、余は王を嫉み猜む者に非ず、却つて王を愛する者なり、夫れ故に勸告す、神の民は恰かも眼前に下る苹果(リンゴ)の如きもの、人に好まるゝも嫌はるゝ者に非ず、故に今王がトボーを召取らむとするは神に抵抗するに外ならず、其刑罰や早晩來らざるを得ず、神は海も陸も支配し且居り給ふもの、王如何に言葉を巧にし逃亡を密にし給ふとも、爭かで其の罰を逃れ給ふことを得むや、基督言ひは給すや「隱て明瞭にならざるなく、藏て露れざるはなし」と。

王「嗚呼吾れは教師の厚情に對しても不義の企てを爲す能はず、只貢稅を取立てる爲に從前の如く只一人行くのみ。

此の如く勸告は、一女を救助せんが爲に眞心を盡して成されたり、然れども痴鈍なる而かも强情なる王は、是を受入れずして尙ほ瞞着せんとせりき、カルバートは慨然として怒れり、彼れは遂に大膽にも左の豫言的言葉を遺して去れり。

「余は王の口が何にを言ふとも唯々として之を聞く、されど王の心が如何なる企てを爲すかを知る能はず、然れども王よ、王がヲノよりトボーを强奪して歸へるとあらば、神罰覿面、王の生命は最も危險の淵に陷るることを忘るべからず。

と、夫れ狂へる者は愈々狂ふて利害を辨別する能はず、迷へる者は益々迷ふて眞理を認むる能はず、人生難事多しと雖ども、善惡を判別する能力を失へる者ほど困りたる者は非ず、彼れ驕傲不遜のツイナヤウ王は、義者の忠言を耳にも掛けず、爾後盛んなる儀裝をなしてバトワを指して出帆せり、而して彼がバトワに到着するや、異教の暴徒と力を合せ、基督教徒の食物を毀ち其器具を窃取し、カルバートに對して表裏の働きをなしぬ、されど驕傲れるものは久しからず、彼がバトワを拔錨してラケンバに歸へらむとするや暴風暴雨は怒濤を逆卷き、王の率ゆる四艘の舟に打ち寄せ來り、ラケンバに向へる舟は漸々元のヲノの方面に向ひ、風は愈々吹き荒れて其勢ひ甚だ猛烈、驚破やと云ふ瞬間に一艘は覆沒し、殘る三艘は船躰こそ全けれ、乘組員は次第々に吹き飛されて殘るは僅々十餘人に過ぎず、風は變化せり、されど船は尙ほヲノの方に吹き

寄せつゝありき、風は再び變化せり、されど海岸に漕ぎ附るとは尤も困難なりき、安息なき時刻の遷り來るは實に速やかなり、夜は恐れ苦しむ間に來りぬ、風勢は一層加はりて、海は轟々として凄文じく鳴り、其危險なること殆んと謂ふべからず、此時始めて王はカルバートの忠言を思ひ起しぬ、然れども危きこと薄氷を踏むより危き此の場合、彼は如何ともする能はざるなり、故に遂に其躰に油を塗り禮服を纏ひ頸飾を附け死を極はめ滿腔の悔悟を以て、其死躰がラケンバに漂着せんことを望みつゝ、天を仰ひて熱禱せりき。

其七　正義と罪惡の戰

暴風暴雨に惱されたるツイ、ナヤウ王は、其翌日僅かに生を得たる部下と共に、トトヤと稱する一小島に漂着し、茲に於て再び出船の準備に取り掛りぬ、然れども王の胸奥は尙ほ甚しき恐怖を以て充たされてありき、何んとなれば、ラケンバに在るの日カルバートの勸めし忠言而かも預言的勸告は、今ま針を其身に刺すが如く答へ且つ當りつゝあればなり、夫れ人は塵世の不幸に會せずんば、天の快樂を悟ると能はざるもの、彼れ王も非常なる艱難と恐怖に驅られて、今ま改悔の念を起せり、近きを棄てゝ遠きを採り、肉を棄てゝ靈を採り、地の事を棄てゝ、天の事を採り、人を賴まずして神を賴む心は勃然として起れり、彼は先づ豕子を犧牲に供して、神の責罰を免れんとせり、されど改悔とはワルカリしと斷言する時は、既に完く其過失罪惡を脫して、之を過去に葬りたる時なら

ざるべからず、彼れ王の改悔や當時手も、足も、口も、心も、一心一躰の一人となりて、謝罪を斷言し、舊き彼れ死して、新らしき彼れ活きたるや否や、是れ實に一の疑問なりき、されど過般の航海に於て彼れが九死の中より一生を得たる場合の如きは、啻に彼れに就てのみならず、世上幾多の人々に就ても、其神を知らざる心底より上帝を呼び起す好機會なり、然り而して、其萬難を排して一生命を得たるが如きは、彼等が粉骨碎身の働きに依りてよりも、寧ろ神の慈善に試みられたる結果と謂はざるべからず、彼れ今まにして斷乎改悔すれば幸福、尙ほ其悔を繰返すとあらば不幸之れより大なるはなし。

斯くてツイ、ナヤウは其殘黨と共に、トトヤを抜錨してラケンバ差して出帆せり、恰かも此時基督敎の傳道船はバトワを去つてヲノに向ひ、將又王よりも猶ほ甚しく基督敎を嫌厭せる、王の弟トキもヲノに向つて

ラケンバを解纜せり、敵と味方が識らずの間に、時を同ふし場所を等ふして航海を爲すとは、實に奇中の奇なり、妙中の妙あり、其彼等が同じ時、同じ航海を成して同じ島に到着するの曙、如何ある現象を發現し來べきぞ、是れぞ吾人が眼前に横はる一問題あり、思ふに是れヲノ島民が擧つて神を信ずるに至る前兆にあらざるおきか、非歟。

トキは最初エンドイに上陸せり、「ラケンバ王の兄弟がゼミマを糺問する爲に來れり」との風説は、部落より部落の間に、人より人の間に噂せられたり、此の風説を耳にしたる基督教徒は、早くも之れに抵抗すべく決心したるのみあらず、其攻撃を防禦せんとて準備しぬ、奇怪にも異教徒は基督教に力を添へて生命財産の保護を托せんとせり、暫時にして使者はトキに贈られたり、其使の要旨に曰く「ヲノ島民は總て基督教徒と、同盟せり、若し二行にして平和に來らば、盛大ある宴會を開ひて歡迎せん、されど事是れに反し殘忍なる處行を以て來らば、非常なる抵抗を爲して懲らしめむ」と、使者は回答を持つて直に歸べれり、「曰く平和に至らむ、故に人民は訪問者に對し、食物等を準備して待て」と、相互の問答は斯くの如くにして結了し、トキは歡迎されてヲノの首部に入れり、然れども邪智惡念に富める彼れは其隨行者に因てよりも彼れ自ら嚴格に守備せり、此の如くして殆んと九十日の長時日は、ツイ、ナヤウ王及兵士の來島を待つが爲に空しく費されぬ、されど王はトトヤに漂着して今まラケンバに歸航中あり、其ヲノに再び來るあるとは徒勞の最も甚しきもの、此事情を毫も知らずして待てるトキ亦た憫れなりと云ふべし、事態既に此の如し、トキは失望の上に失望を重さね、遂に詮方盡きて貢稅のみを受取り、遁るが如くラケンバ差して歸途に就けり、

飜つてツイ、ナヤウは一と度暴風暴雨の困難に遭遇してより、殘忍の特

質稍や變化して軟弱となり、爾後貢稅を徵收するにも、トボーの如く甘心を以て先づ人民を和らげんと欲し、ヲノ島民も事の茲に至るを願望すると同時に、宣敎師は機會乘ずべしと爲して之を奬勵しぬ、然れども彼が再びヲノに至るや既往の困難を忘れたるのみならず、宣敎師の厚遇をも忘却し去り、一度ならず二度ならず彼のゼミマを要求せんとせりき、嗚呼如何に曲り曲りて其腸の腐れたることよ、されど熱心なる信仰は人を動がすものあり、然りゼミマの燃ゆるが如き信仰は、遂に王の惡意奸計を施すに餘地なからしめ、爾來殘忍なる王の處行は、旭日に霜の消へ行く如く漸次消滅する如く成り行きぬ。

然れども一面に善人の現はれ來らんとすれば、他面に惡人の威を逞ふするは是人間世界の常理なり、彼れカルバートがヲノを訪問してより久しからず、一度基督敎徒と同盟したる異敎徒は、再び嫉妬心を惹起して基督敎徒を虐待し始めぬ、或日の事なりき、基督信徒は二の祈禱會を開ひて、靜思嚴肅に祈りを捧げぬ、祈禱半ば窓外人聲喧しく騷ぎ立ちぬと思ふ瞬間、俄然白刃は室内に閃き、鐵拳飛び、罵詈殘暴の悲劇演ぜられ靜肅なる祈禱會は見る間に無殘なる修羅場と一變しぬ、此時集會者の半數は毒刃に罹りて無慘の最後を遂げ、其又半數は辛ふじて逃亡したるものありと雖ども、多くは重傷を負ふて悲痛哀苦に惱むの不幸を見るに至れり、されど思へ、剛邁不屈の氣象、堅忍不拔の精神に富めるは、神を信じて生命を解する基督敎徒の專有物なり、彼れ殘忍なる迫害に遭遇したるヲノの信徒等、豈に這般の妨害に節を屈する者あらむや、迫害は爾後數週の間絶へず成されたり、然れども信徒の熱心なる福音の證しと堅忍不拔の抵抗は、遂に全く異敎徒の暴威を碎ひて失望せしむるに至れり、爾來ヲノ傳道の光景は一變して、福音の光の日々夜々發輝す

るを見るに至りぬ、ラスキン曰く「忍耐は幸の内の尤も美しき尤も價ひあるものにて、亦尤も類ひ稀れなるものなり、總ての幸福及總ての力の根底には必ず忍耐おつて存す、若し忍耐おくんば、希望も幸わひには非す」と彼れヲノ基督教徒の處行證し得て餘りありと云ふべし。

是れより星霜を經る殆んと三年、カルバートは再びラケンバよりヲノ傳道上の視察をおしぬヲノは吾人が前に述べ去り述べ來りたる如く福音宣傳に就ては尤も困難の地なりき、故に今ま茲に其三年後の光景を記して讀者に照會せざるを得す、何んとおれば此の三年間の變化は該島にある傳道者及信徒苦心の結果を知るに最も適當おればなり。

カルバートが三年の後ちヲノを視察せし時は、從前の困難に反して其土民は柔順に化じてありき、教會は改宗者の熱心おる義捐金に依りて建設せられ、聖靈は信徒全躰の上に充ち滿ちてありき、加之カルバート

が滯在中數週の間に殆んと二百餘名の土人は改宗せんと熱望するに至り、信徒は毎日毎夜之れが爲に祈禱を捧げて神を讃美し、而して彼れ求道者の多くは遂に擧つて受洗するに至れり、殊にカルバート監督の下に禮拜式は開かれて神の秘義は頻々吹き込れぬ、當時一の新おる改宗者は、其充溢せる信仰をカルバートに告白して曰く、

「私は神を愛す、主おる神は私しを愛し給ふを知る、故に全心全躰を基督に委ね、且つ何事を爲すにも先づ神の御心に適ふや否やを聞き、きて後ち事に着手するは、實に幸福おると信ず、私は聖おる神の働きが始まる今日まで生存したるを感謝す、尙は今後進んで福音を證しするの幸運に至れば、私の幸福は之れに過ぐるものおし、私の心は今ま神の無限の恩寵に依て充されつゝあり、嗚呼教師よ私は實に感謝す、

と、ヲノ島民が其の生涯を不幸悲慘の淵に沈めんとしたる處より救出して、天を超へ、日を超へ、星を超へて高く靈界の内に進ましめたる、宣教師功勞の如何に偉大なるよ、ゴエテは嘗てエッケルマンに語りて曰く「余は常に思へり、此身は幸運の人なり」と、然れども彼れが一生涯は、厭世の人ともならざれば亦た基督教徒ともならず、詮じ來れば半信半疑、而かも實世界に戀着せる不運兒たるを免かれず、されどカルバートや身は現在浮世の不運兒なるが如しと雖ども、神の前に於ては實に榮譽ある幸運の人と謂はざるを得ず、聖書は示して曰はく「我が愛する兄弟よ、爾曹貞固して動ず恒に勵て主の工を務めよ、蓋なんぢら主に在て其行ところの勞の徒然からざるを知ばなり」と。

シラスと稱する土人の傳道者は、嘗てカルバートに祈禱を勸められ祈りを捧げて曰く

「私の軟弱なる意思は戰慄せり、されど非常に勵まされたり、私の靈魂は活潑に且つ爽快にせられたり、ヲー父なる神よ、私が見聞き、感する總ての上に恩寵を垂れさせ給へ、私しの力を鍛ひ給へ、唯私は萬能の主なる神の御名に依りて之を祈り且つ願ふ

と、熱心なる信仰を有てる善良の信者の出來たる豈に茲に止んや、爾來福音は至る處に信ぜられ其勢ひ非常にして其後八名の土人の傳道者は、遂にヲノ以外の土地に傳道を始むるの美舉を見るに至れり、ヲノ傳道の觀察茲に終局を告ぐ、吾人は今ま眼を轉じてビワ島を觀察せざる可らず。

其八　ビワ孤島及バウ孤島(上)

一千八百四十八年、カルバート傳道の舞臺は、ラケンバより西部群島の方面に轉じぬ、此地方は彼れが親密なる同窓の友、ジョン、ハントが數年間犧牲的福音宣傳を成せし處なりき。

抑もジョン、ハントはビワ地方に非常なる働きを爲しつゝありしも、不時の疾病は一朝此の冒險傳道者の一人を驅て黄泉に入らしめ遂にカルバートをしてラケンバよりビワに移住するの已むを得ざるに至らしめぬ、然り而して、ビワはナ、ピチ、レブ則ち大非地の東岸、珊瑚礁外に位せる一小島にして、當時該島は僅か二哩を隔てゝ存在する、バウの尤も貴重なる屬地の一なりき。

宣教師が嘗て、バウ島に傳道局を設立せんとする時、彼等は全島王の勢力甚だ強きを異教徒の亂暴甚だしきに就て最も憂慮したりき、何ぞ

とあれば尤も殘忍にして、殺生を嗜める「食人々種族」の一人たるバウ舊王タノアは未だ存命すればあり、然れども實際の施政は利發にして判斷力に富める、タノアの子孫サッコンバウの手中にありき。

一千八百四十九年、非地を視察せし「ハバンナ」號の艦長アースキンはサッコンバウに就て記して曰く

「酋長(サッコンバウ)の外觀に依て推考すれば、彼れは寛容の量に富るが如し故に之を説服する困難の業にあらざるべし、彼の手足は美はしく整頓し、其面貌は最下等の土人よりも遙かに優しく才に豊かなり、蓬の如く亂れたる頭髪は羅紗を以て之を蓋ひ、煤黑の衣服は其身邊に圍繞せられ、恰かも之れ東方サルタンの外觀を見るが如し、彼は誠に王らしき大度を備へたり。

と、此酋長の改宗するに就ては、カルバートは心密に憂慮してありき、さ

れど一と度蒔きたる種子が美はしき實を結ぶまでには、幾多の星霜を經過せざるべからざるにせよ、其最も熱實なる祈禱と至誠神を愛する働きは、遂に善良なる果實を結ばざるを得ず。

當初より宣教師は尤も端正なる、而かも思慮ある行狀に由て、サツコンバウを敬服せしむる勢力を得たり、されど未だ直接に警戒、寧ろ懲戒を加ふるの好機會を得ざりき、公務あらずと雖ども宣教師はバウに福音を宣傳すべく許されたりき、カルバートは爾來絶へず訪問をなして機會あらば王と交際を成せり、而してサツコンバウの道理心を警醒するの試みは、幾度となく試みられたり、然れども基督教の主義は、王の不正なる處行を抑制する者ありと考へしめ、彼は自己目前の小利に良心を眩惑せられ、此の眞正なる教に滿足せざりき。

されど殺を嗜める舊王タノアは、寛容にも其の夫人の一部が住居せるバウに近き殖民地センビに福音を宣傳すべく許容せり、此の許しを得たる宣教師は、タノア酋長の妻コ、ナ、マロが、速かに聖なる神を信じて祈禱を捧ぐる喜悅なる時の來るを樂しみ且つ微笑ぬ、何んとなれば此一夫人を教化するは、延ひてタノア酋長の一族をして福音を信ぜしむるに至る導火線なればなり、既に導火線なりき、傳道者は大に之れに力を注がざるべからず、然れども悲哀は今まカルバートの頭上に來れり、悲哀とは何事ぞ、則ち其愛兒の死是れなり。

一千八百五十年の四月、カルバート夫妻は俄かなる其愛兒の死に因て悲痛に打れたりき、彼れの一家が非地に到着して殆んと五ヶ月、此一子は生れたるなり、思ふに當時友もなく親族もなき寂寥たる異鄕の天地に、嬋妍たる美、窈窕たる姿の、花よりも、蝶よりも、優しき一の慰籍者を得たる時の兩親の喜悅如何ほどなりしぞ、吾人實に之を想像して眼前其

光景を見るの感おくんば非ず、加之此の夫妻が、非地傳道終局の曙に、彼の氣高き顏、涼しき目元、薔薇色の頰、利發らしき妻の愛兒を、英國にある父母親戚朋友に見せしめむとて、其成人を如何に樂しみたるよ、然れども望みは空しかりき、樂みは水泡おりき、俄然侵し來りし疾病は、此の兩親の望みと樂みとの一大根源たりし其愛兒を惱ますに至りぬ、醫藥を服せしめむか野蠻の地おるが故に醫師も居らざれば藥もおし、されど父母愛情の切おる見る見る手を盡さずして殺す譯に行くべからず、彼れ傳道者にして國手にわらざるカルバート、事態既に斯くの如くなる故に亦た國手の勞をも取らざるを得ず、嘗て英都ロンドンに學生たるの日聊か醫學を研究せし彼れは、其尤も不得意おる、而かも拙おる醫術を以て愛兒の生命を左右する不幸を見るに至れり、恰かも之れ庸醫をして外科術を施さしむるが如きもの、其危險謂ふべからず、然れども思へ世上百般の疾病には、醫師よりも藥よりも、先づ注意周到おる看護者が尤も大切おり、而かも況んや信仰厚き看護者の注意は、時に危篤の患者を回服せしむる力おるに於てをや、彼れカルバート夫妻は其拙き醫術を以てよりも、其熟練せる看護に加ふるに祈禱を以て愛兒を慰め勵したりき、彼は唯萬事を神に托して自己の力を賴まざりし、熱實おる祈禱は天の父を動かしぬ夫妻の嘆願は受入れられたり、疾病は日に彼の愛兒より取去れて、遂に健全に回服されぬ、思を焦がし心を苦しめし夫妻の悅び如何ばかりおりしぞ、斯くて五年の星霜は喜び樂みの中に過されたりき、人生兎角憂喜に支配され易し、其一生を喜悅のみに因て終るものは殆んと稀れおり、カルバートの愛兒メリーが五歲の春を迎ゆる時、危險は再び彼の女の上に侵し來りぬ、當時カルバートは傳道局建築に多忙おる時にして、愛兒の看護に充分おる手當をなす能はず、是れ

が爲め娘は健康の平衡を失ひ、生死を量る權衡は死の方に重かりきメリーより二年若かりし幸福なる兄弟は、其無邪氣にして若年なるに拘はらず、其愛姉の苦み惱めるを見て、滿面憂慮の氣色を帶び、或は脊を撫で或は脚を擦りて慰め勵ましたり、されど一瞬轉息、一時呼吸は絶へなんとせり、此時大膽なる若年の兄弟は、絶叫して助けを呼べりき、恩寵深き神は此兄弟に宿り給ひてメリーを救ひ給ひつるか、彼の一絶叫は、メリーの鼓膜を打て不思議にも快愉に向はしめたり、是れを聞き且つ見たるカルバートの一家族は、當日滿腔の喜悅と感謝を以て神に祈りを捧げぬ、嗚呼隱微なる處に神は宿る、思ふて茲に至る、坐ろに信仰の力の大なるを驚歎せずんばあらず。

爾後彼の善良なる母の注意深き敎育の下にある一女は、愛情、慈悲の如き美なる性質を愈々發達せしめ、殊に神の言葉を讀み且つ祈りを捧ぐ

るを喜び、父母に對して孝順に成りたる如きは、彼女が性情發達の著明なる點なり、八歳の春を迎へたる時は、英文を讀むが如く非地語を讀み、土語を以て土人に神を知らしむる事の容易なるのみならず、英語の經典を土語に飜譯する事すら難からざりき、土人は此の處女を尤も愛し、彼等は女を招きて簡單なる救主の物語を其優しき口より聽くことを希望せりき、恰かも當時の事なり、メリーは一夕立上りつゝ母に向て曰く

「最愛の母よ、妾が心に考ふるに、妾は近き内に死するならむ、妾は現世に永く生存する能はざるならむ、妾は黄泉に入りて天の父と共にあるならむ……アヽ母よ

と、此預考は當時彼れ自らの胸中に毫も恐怖を起さゞりしとと信ず、何んとなれば母が問ひ返へせし時、彼女は答へて

「妾は死に就て毫も恐れず、妾は父母を愛しむよりも、基督を尤も愛

しめば

と謂ひつればあり、嗚呼如何に幸福ある處女あるよ、何んとあれば恐怖あしに死の砂漠を通して、早く基督と一躰あるとを學びたればあり、嗚呼如何に幸福ある父母あるよ、何んとあれば其愛兒が現世を棄てゝ基督に行くを喜べばあり。

然れども、カルバート夫妻は尤も憂慮してありき、彼は兒を其本國たる英國に送りて教育せんと起居常に望み居りたればあり、されど運命は人力の得て如何ともし難き所なり、彼は遂に愛兒の生死を神の支配に委ね、以て犧牲に供せんとは決心しぬ、幾時もあらずジョン、ハントの寡婦英國に歸朝するとあり、彼の可憐ある一小女も之れに托して本國に送られぬ、而して女がヲークランドより父母に贈りし書信に曰く

「最愛ある父母よ、妾が一行は海路風波穩かにヲークランドに到着し、今ま尤も愉快に幸福に滯在致候、此は皆あ主の恩寵に出づると感謝仕候、今ま左に航海中の摸樣を記せんに、過る金曜日ナンデーを抜錨してピワ島を一見し、翌週火曜日の夜カンダブを通過して、水曜日の拂曉ニユージートランドを煙波渺茫たる間に眺めつゝ、風波穩かある爲め遂にヲークランドに寄港すると相成候、日曜日午前三時頃より降雨甚しく恰かも非地の暴風雨の如く吹き荒れ候、午後に至りて愈々荒れ、夜に入りては風勢一層加はり、船は錨を引ひて岩礁の上を走り危險謂ふべからず候、最愛の父母兄弟よ、妾は限りあく離別せざるべからず、妾は唯父母兄弟と共に神の前に幸ひあらんとを祈り候

と、然れども彼れは幸ふじて英國に歸へり、爾後再び疾病の爲に惱まさるゝに至れり、此時伯父のフヨーレルは曰く「メリーよ汝は基督を見ざ

るべからず、否ある基督に萬事を委ねざるべからず、とメリーは之れに答へ、又曰く「妾は斯く成さん」と、此の一語以て當時如何に其病の危篤あらしかを推知するに餘りあり、何ぞ知らん此は彼女が臨終の言葉あらむとは、天涯萬里の異郷にあらで其報道に接したるかパーク夫妻の悲痛哀絶如何はさあらぬだに、著の記する處によれば、當時彼は只勝思歎慕に餘念あかりしとぞ、

ON THE BANKS OF THE REWA.

レワ河畔の景

其九　ピヲ孤島及バウ孤島（中）

タノア王の貢税として大なる奉納物を携へたる、エムブトニと稱する使者は今まバウに到着しぬ、非地島の習慣上人肉は、彼の使者の一行を饗應する爲に準備されざるを得ず、漁夫の酋長エシカビンジの部下は、寵に炙る食料を得んとて、敵而かも無罪の友人を虐殺せん爲に出船せり、恰かも善し其附近の海邊に婦女の一群は漁りつゝありき、彼の惡漢等は得たりと「マングローブ」茂樹の蔭に潜み隠れて、今か々と其近づき來るを俟ち受けたり、是を知らざる漁婦等は、魚の岸邊に逃るに從ふて知らず覺へず岸に近づきぬ、漁婦は敵の眼前に來れり、又は翳されたり、嗚呼一刹那、十四人の婦人は遂に捕獲されてバウに持歸へられたり、此新聞は唯幼き子供と共に留守居せるピヲのカルパード夫人及リース夫人に達しぬ彼等は大に喫驚し憂慮しぬ、何んとおれば當時其夫は近

島に巡廻中あればあり、「アヽ彼の捕獲者の中に夫はあらざるか」、との念は両夫人の胸奥に燃へ、今は悠々後報を俟つの暇あらず、遂に大膽にも婦人の身を以てバウ島に渡り其實否を慥かめんと決心するに至れり。傳道者の夫人を載せたる迅速なる獨木舟は、バウを差して出帆せり、船がバウ港に入らんとする前、死を祝する大鼓と砲發の響は聞へぬ、嗚呼「最愛の夫は虐殺されたるに非ざるか」と懸念しつゝあるカルバート夫人の胸中果して如何、暫時にして船は港に入りぬ、彼は直に上陸して婦人禁制の王邸に急げり、然れども守兵は通行を許さゞりき、されど夫を救助せんと欲する情の切なる夫人、今は己が生命の安危を顧みるに暇あらず、遂に彼は王の居室まで踏込んで探索するに至れり、タノア王は仰天せりき、此大膽不敵の狼藉者は、婦人殺害の機會を失はしめ、知らず識らずの間に殘忍の處行を中止せしめたり、されど九名は既に無慘の

最後を遂げたりと雖ども、殘る五名は此英雄的夫人の偶然の妨礙に由て其生命を完ふするを得たりき。[illegible]吾人は今ま此出來事を觀察することに於て、殺を嗜むと豺狼の如き「食人々種」も、死を恐れざる大膽なる二夫人を防禦する能はざるとに就て秋毫も奇怪の念を抱く能はず、何んとなれば夫人は神に於て尤も強く、如何なる大事に遭遇するも進んで之れに飛込むの勇氣あるとを信ずればなり、這般の事、彼れに取りては未だ一小出來事たるに過ぎず。

斯くてカルバート、リース二夫人は、此處を出帆する前に當り、無殘の酋長エンガピンジの家に至り、惡は義に勝つ能はざるのみならず、神の前に於て嚴重に罰せらるゝことを勸告しぬ、酋長は此談話を聞ひて只點頭するのみ別に感服したる模樣なかりき、故に二夫人は猶は其妻に面會を求めて基督教誹謗の非理を辯破せり、是れより後ちエンガピンジは、

戰爭の開けたるに際し、他人の屍を携へ去る途中敵の爲に殺されたり、今其埋葬されたる時の光景を記さんに、彼が殺さるゝや土人は其國法に由て之を島の中心に置き屍の臥せる臺の兩側には、一方に其妻を殺して置き、他方に其母を殺して置く、恰かも母と妻は之れが守備者の如し、加之其臣僕たりし者は悉く縊殺して棺の周圍に詰め、死して尙ほ其主人に尊敬を表せしむるが如し、然り而して、此總ての死者を合して一棺とおしたる者を始めて埋葬す、其殘忍暴虐亦驚くに堪へたりと謂ふべし。

茲に亦た兩夫人がバウに渡航したる數日にして、船長アースキンはビワに寄港しカルバートと共にサッコンバウを訪問せんが爲にバウに渡れり、此訪問は彼の兩夫人の上に一層の勢力を與へたりき、而して、アースキンは種々なる恐嚇と權威を以て、彼等が殺人及び食人の惡慣習を驚愕せしめたるのみおらず、宣教師に就て基督教を研究すべしと逼れり、彼はカルバートに非常おる勢力と尊敬を與へたりき、是れ或は基督教の主義上より云へば穩當おらざるが如しと雖ども、此の蠻徒を教化するには勢ひ之れに出でざるを得ず、況んや其目的は虐待せんとするに非ずして此民を文明に誘導せんと欲するにあるをや。

此翌年の春、非地傳道會社はニューソースウエルスよりムール及ミラードの如き補助傳道師を得ることとなり、此人々がビワに到着するやカルバートは殊更ら感謝會を開ひて信仰を奬勵せり、會は盛大に行はれ、集る者は信仰に富み義氣に豊おるの人士おり、而して其信仰の熱度の高まる處、義氣心の溢るゝ極、三十磅の喜捨金は、白人種の住民及宣教師より寄附せられ、七十六枚の壘代用の蓆、二十四の籠、三個の弓矢、七斤の檀香木、十六の扇子、六十三の棍棒、一個の枕、三十一本の鎗、四枚の婦人服、

三反の反物、五個の水桶、四個の櫛、一匹の豚は、未だ神を信せざる、而かも唯基督教の美舉を見しばかりなる、土人一部の慈善家より殊勝にも寄贈せられたり、而して此寛容なる土人の義氣は教役者に非常なる刺激、を與へたるのみならず、此土地に一層希望を抱かしめたり、殊に知らず此土人等は、彼の殘忍なる人躰料理の惡行を嫌厭せる善良の民なるや否やを。

タノア舊王を基督に導きてバウの風儀を一變せんと望み、且つ其殘酷なる抵抗を恐怖しつゝありし一傳道師は、或日王が死に瀕しつゝあることを發見しぬ、吾人が前に陳述せし如く、非地の習慣として貴人が死亡せし時は、其妻並に下僕を縊殺して死者の側らに附添はしめ、而して後ち之を埋葬するが其例なり、今タノア王にして死せば、亦た此の悲慘の例を以て埋らるべし、カルバートは起居常に此弊習を打破せんと苦心しつゝありき、機會は至れり、タノア王危篤の報告がバウの傳道師よりピワに達するや、彼は早行ワッフォードを伴ふてバウに渡れり、大なる鯨齒の奉納物は慰めものとして贈られたり、若し必要あるに於ては、彼れが生指を切斷してすら王の心を迎へんとせり、夫れ人の疾病に罹り熱度頓に增すや、頭重くして眼を開くの力なく、閉目沈思して其運命を考ふるの念切なるに至る、此時に方りて其心底に神を注入すれば人其死を恐れざるに至らん、カルバート豈に之を知らざらむや、彼は之れに精通して今まタノアを導かんと欲するなり。

カルバートの要求に依り傳道局の戰鬪船エッチ、エム號の船長はサッコンバウの父タノアが死亡するに至れば、是れと同時に彼の惡むべき慣習を廢正せんことを懇願せり、されどタノアは其妻が夫と共に靈界に同伴するを悅ぶとの遁辭を以て之れに應せざりき、此談判中カルバー

トはヲバラウに去つてありき、而して王臨終の呼吸は刻一刻急ぎ、死は瞬一瞬に迫りつゝありき、是を聞きたるワツフヲードはバウに急行せり彼は王の家に到着しぬ、當時彼れが眼に映せしものは何んぞ、三人の犧牲が準備されてありしと之れあり、サツコンバウは傳道師を見て其申譯あきに狼狽せり、彼は其心痛に得堪へずして叫び出でぬ「吾は如何にして宜しきやワツフヲード君」と、最困難の位地に立ちしワツフヲードは答て曰く「靜肅に、君、三人も殺せば澤山あらむ、余は誠に彼を憫然に思ふあり」と酋長は再び發言して曰く「吾も亦た憫然に思ふなり、然れども君よ、唯僅かに五人縱殺する豫定あり」と、嗚呼殘忍、悲慘。

其十　ピワ孤島及バウ孤島(下)

往昔モゼスが「イスラエル」人を導びき、四十年間砂漠に露宿して、終に之れをカナンの樂土に殖民せしめんとするや、常に敎ふらく「汝等若し神の旨に反かば、決して國を造ると能はず」と、淸敎徒が初めて米國に着するや、先づ祈りして云はく「吾等が子孫は神の民たらざる可らず」と、則ち先づ會堂を建て、次に學校を起して兒童の心底に抜く可らざる精神を植付けたり、理は一なり、凡そ眞誠硬固の神の國を此世に作らんと欲せば、必ずや、此の信仰と決心を以て其基礎と爲さずんばある可らず、彼の黃金の力を以て人を靡かし、威權を以て罪惡を壓し、壯大なる寺院を以て民を服せしめんと欲するに至りては、傳道事業の事何の功をか爲さん。

二宮金二郎先生曰く「開墾とは、荒地を變へて美田と爲すとなり、今日の

美田を數百千年勞苦したるの結果なりと知らば、目前の荒地を一化して美田と爲さんには則ち數百千年間の勞苦を一時に耐るの決心あかる可らず」と、夫れ宗教の眼より此世を見れば一の荒地に異あらず、既に荒地あり、此巨木森々、荊棘亂々たる荒蕪地を耕やして美田と爲さんと欲するには亦た數千百年間の苦勞を一時に耐ゆるの偉人物ならざるべからず、非地に於けるカルバートの如きは實に其一人なり。

今や身を献げて野蠻の民を愛し、万疑万艱を排して情を泰山の安きに置き、理想高潔、愛情泉の如きカルバート事業の成功は日に近かんとす、一千八百五十七年、幾度か聖靈の進行を害し、幾度か福音の試みに遇ひたるサツコンバウは遂に洗禮を受けて基督教徒となるに至れり、殘忍暴虐なると猛獅の如く暴虎の如き人物は、今や一變して正直と、眞實と、勤勉との念に滿たされたる善良の人と化したるのみあらず、宣教師の厚情ある教育と周到なる勸話は、遂に彼れが所有の莫大なる資産を傳道費中に義捐せしむるに至り、且つ從來の多妻主義を放棄して、一婦一夫の美はしき新主義を以てサマヌヌと結婚するに至りぬ。

ウヲーターホースは授洗式に於ける當時の光景を記して曰く

「午後に至り、王は公然受洗するに至り、神の御前に此罪惡世界の偶像、華美、高慢、肉慾を棄てることを誓約したるのみあらず、基督信徒の天職を重んじ、其一生は聖ある神の御名に依りて歩さんと威儀嚴格に告白しぬ、

と、既往に於て彼は自らバウ島の神と信じ、土民も亦た神の如く總ての尊敬を王に表したりき、されど今まは自ら謙遜にして、彼の大なる造物者而かも仁愛深き救主を崇拜しぬ、請ふ吾人をして少しく王の既往を述べしめよ、彼れが妻は當初彼れの辱しめたる者ありき、妻の實父は彼

之を虐殺して其肉を喰ひたりき、妻が妹の親族は彼れが命令を以て縊殺したりき、妻が親里の友人は彼之を食ひたりき、其子孫は彼れが殺害して一夜宴會の客膳に上したりき、嗚呼殘忍なると獅よりも狼よりも甚しき此王、今一變化して謙遜柔和なる羊の如く成る、誰れか基督教は社會に害毒を流す者なりと云ふや、這般の如き好歴史、吾人未だ他の宗教に於て其比を見ず。

サッコンバウ一日土人に語りて曰く

「余は實に從前惡人なりき、余は實に從前國を騷がしたりき、當時宣教師は數々來りて神を信せしめんとせり、されど余は嚴として動かず尚惡を働きつゝありしも、全能の神は吾を守護して遂に信徒となし、喜ばしく此日を送るの幸ある境遇となし給ひぬ、人は獨一無二の神を信ずべき者なり、余は世の惡を鞭撻して悔ひ改めさせんと欲するの情切なり

と、彼は深く神の愛に打たれたるが如し、此後久しからずして、女王も亦た受洗するに至り、爾後基督教は其心靈上に變化を與へたるのみならず、其風俗をも變化せしめ、女王は恰かも南部墺地利のアデライドに於ける貴夫人の如き粧ひを爲すに至れり。

サッコンバウの善行進歩の程度は、啻に偶像崇拜より基督教に改宗したるに止らず、彼れは和親を結ばんが爲にレワ王に使者を贈れり、レワ王は此使者に對して「バウ王は嘗て我が下僕を殺害して其肉まで食ふたる讐敵なるを以て平和を結ぶ能はず」と言ひ放ちぬ、從前なれば憤怒一番して直に攻擊軍を送り、之を懲戒するサッコンバウなるも、今は寛容の量豊かにして、彼の回答に接して毫も怒らず、寧ろ神の權威に依りて之を服從せしむる時機の來るを俟てりき。

サッコンバウは此の如く平和的手段を以て服従せしめんと欲すれども、レワ王は奸計を施して彼れを撃たんとせりきコリある酋長はレワ王より賄賂を受け、其部下を處々に潜伏せしめてサッコンバウを暗殺せんとせり、然れども、カルバートの奇計妙策は、彼の暗殺者をして手を下す機會なからしめ、遂に彼等は其望みを空ふしてレワに歸へれり、此光景を觀察したるバウ島は、基督教の神が其の島民を守護するとて大に喜悅し、且つ斯教の上に聊か耳を傾くるに至りぬ、一千八百五十五年、レワ王は俄然死に掴まれて黄泉に入り、サッコンバウの身上は全く平和に成り將又バウ並にレブ間の傳道界も平和に歸し、爾來サッコンバウの夫妻は絶へず宣教師の勸話を聞きて信仰愈々燃へ、アジ、リジアの如きは遂に身を傳道界に委ね土人を誘導し、バウ、レブの荒蕪地は美田と化し去るに至れり。

トルストイ歌ふて曰く

勞役は悲しみにあらずして喜びあり、
神聖にして重大なる義務あり、
最上の滿足を與ふるの道あり、
人間その救に入るの門なり。

其十一　福音の凱旋

一千八百五十六年の春カルバート、夫妻は、多年住居して愛着せる第二の故郷を去つて英國に歸へれり、彼れが最初非地に移住するや、總ての樂しみを荷ふて移りたりき、故に輕々しく其辛苦の實を棄てゝ故國に歸へるが如きことをせざるあり、彼の孤寥無味の一孤島、風荒れ砂飛ぶの新天地は、彼れが忘れんと欲して忘る能はざる、而かも彼れの爲には謂々たる和樂ある地なりき、此回の歸朝は、此の新天地に永久的移住の準備を爲さんが爲に歸るに過ぎず。

カルバートは壯年ある二人の愛兒を伴ひ、苦年なる三人の愛兒は、其本國たる英國の季候と大相違せる非地の季候に慣さんが爲に殘したりき、父母を離れたる三人の可憐兒は、土人が訪問して種々なる物語を爲せる外、何の慰樂もなき異鄉に殘れり、此時全島に尤も必要なる者は、一時眼を慰め樂をしむる遊戯物よりも、限りなく心を慰め勵ます聖書ありき、教役者等は此の事に就て尤も苦心し、カルバートが非地を發して其本國に向ふ時、恰かも英文の聖書は非地語に飜譯せられたり。

クロス、カージル二人が非地に傳道せる時代には、土民は未だ記すべき文字を有せざりしも、嘗て此二人に伴はれてトンガに渡りたる土人の傳道者は、其後文字を綴るに至れり、而してトンガ人の智識は經典飜譯に渉からざる利益を與へ、第一冊はヲセニヤ音の如き者にて印刷されぬ、其後馬太傳の飜譯書は、印刷に附せんが爲にトンガに送られたるも、爾後信徒の需要は日に多くして現在の出版にては不足を感ずるより遂に土語の活字と印刷機械を英國に於て製造せしめ、是れを以て陸續飜譯書を出版するに至れり、此年メッスルス、クロス、カージル、三名の飜譯せしウエスレー初學問答と馬可傳の印刷成りぬ。

非地語に熟達せるカヘジルは、專ら飜譯に從事し、カルバートとジャガーは、實地傳道に奔走せる側ら土人と交際して新語を喟集し、以てカージル飜譯の不足字を補充せり、而して暫時にしてラケンバ語の單語篇並に文典の編纂あり、新來の傳道者に尠からざる利益を與ふるに至れり。

一千八百三十九年七月、印刷機はレワに移され、カルバートは此監督を爲す側ら巡廻傳道を爲さんが爲めにラケンバを去れり、レワに於ての印刷は、日々英國及外國聖書會社より送り來る紙の五十束を出版し、其多忙は實に謂ふべからざるはどありき。

非常なる困難は、今ま飜譯家の前に發現し來れり、此は異種の語が各島の土人に使用せらるゝと則ち之れなり、或る場合に於ては此相違誠に僅少なりと雖ども、他の場合に於ては此相違尤も著しかりき、事態此の

如くなるが故に、當初出版委員は、異種の國語を使用する各島の土人に、各々特別の聖書を印刷して其需要に應せんとしたるも、斯くては其繁錯困難非常にして到底出來得べき事にあらざるより、遂に將來永久にバウ語を以て譯述するに決せり、而して今ま殊更バウ語を飜譯語と定めたる所以を尋ぬるに、一は言語學上純粹なる國語たると、他は此語が非地島民の普通語たると同時に、バウは將來該島の中心となるに至る爲めなりと云ふ。

一千八百四十四年印刷所は火災の爲めレワよりビワに轉じ、一時不用となれり、然れども機械運轉の時節は久しからずして再び至り、一千八百四十七年、新約全書の飜譯は結了して、非地語の新約聖書は、各宣教師信者の手に行渡り、次ひで舊約聖書の印刷成り、爾來福音は全島至る所に宣傳せられ、教會及講義所の數千三百二十二、宣教師の數十、酋長六十

五、問答教法者四十一、教育家千十六、地方傳道師一千八百八十九、信者の數二万八千百四十七、求道者四千百十二、學校千八百二十四、教員二千六百十、人口十一万六千人の夥しきに至り、最暗黑の一孤島は茲に一變して文明國の一となり、豺狼の如く血を見て微笑む十餘万の「食人々種は、其の風俗習慣思想を改めて文明的好生涯を送るに至り、剛壯勇偉なるカルバートの傳道事業茲に終局を告ぐ、ゼネラル、ブース嘗て記して曰く「余は、カルバート傳を、殆んと四十年に近き間の我が同伴者、相談相手、事業の仲間と爲す」と、蓋し冒險的事業心に缺乏せる我邦の人士、此書を一讀して得るところあらば、著者の望み足れり。

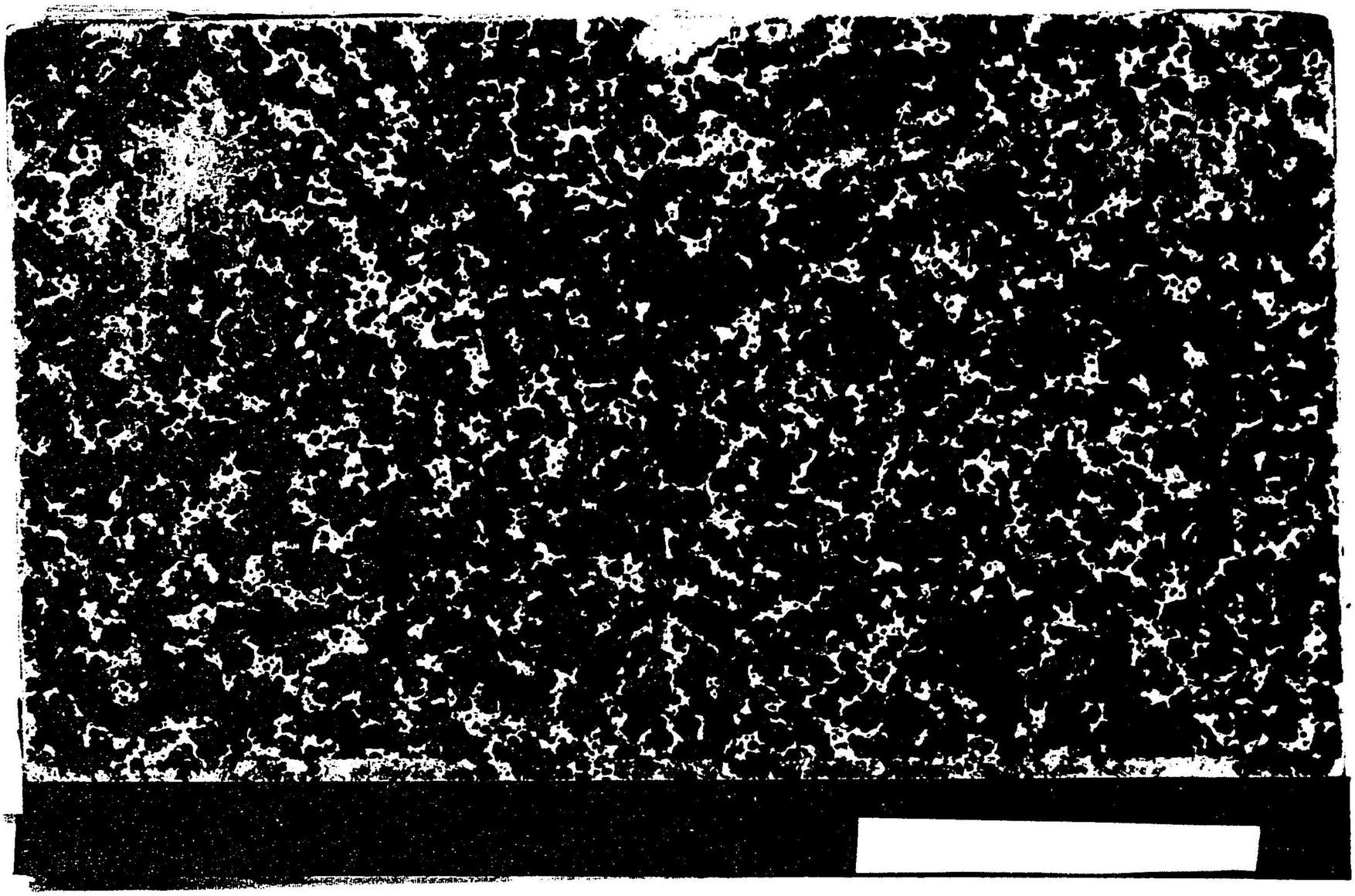
カルバート傳　大尾

明治二十九年十月三十日印刷
明治二十九年十一月[illegible]日發行

發行者　堀田達治　東京市京橋區銀座四丁目二番地寄留

印刷者　小方仙之助　東京市麹町區有樂町三丁目二番地

發行所　教文館　東京市京橋區銀座四丁目二番地

印刷所　青山學院實業部　東京府下豐多摩郡澁谷村一番地青山學院內

19
489